

愛知県長久手町

岩作城跡発掘調査概要報告書

1997

長久手町教育委員会



写真1：第一次調査区域
井戸跡出土遺物

序

長久手町域は、尾張東部の丘陵と香流川が開いた平地からなり、起伏に富んだ地形を示しています。その香流川流域には岩作城跡がある岩作など由来の村落と田畑があり、落ち着いた田園地域を構成してきましたが、近年丘陵部の新興住宅街やいくつかの大学キャンパスも加わり、長久手町は、あたらしい町づくりが進んでいます。

一方、この長久手町は、史跡『長久手古戦場』をもつ歴史の町でもあります。天正十二年の小牧・長久手の合戦は、織田信長亡きあとの豊臣秀吉と徳川家康の覇権争いの場でした。合戦の様子は、多くの書物によって紹介されていますが、それを裏付ける数々の史跡が町内には遺されています。また、この合戦に由来するという農民武芸「棒の手」も愛知県の無形民俗文化財に指定され、町民の努力によって永く伝承されています。

この度その発掘調査の成果が報告されます岩作城跡も、長久手町の歴史の一端を担ってきましたが、町の中心域にあって諸事業のために消滅を余儀なくされたものです。地域の活性化という今日的課題と文化財保護との調和は、望んでなお得難いことですが、本書が岩作城跡の存在を永く後世に伝えるものとなり、また文化財保護の推進に役立つことを念じております。

最後に、愛知県教育委員会文化財課の赤羽一郎氏を始め発掘調査に当られた方々、ご協力をいただいた長久手農業協同組合始め土地所有者の各位に、厚くお礼申し上げます。

平成9年2月1日

長久手町長 加藤 梅 雄

例 言

1 本書は、昭和60・61年度に三次にわたって実施された、愛知県愛知郡長久手町大字岩作字城之内に所在する岩作（やざこ）城跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査の体制・調査期間等は、次のとおりである。

第一次：長久手農業協同組合の委託をうけて、岩作城跡発掘調査会が実施した。実施にあたっては、昭和60年度地方振興事業として、愛知県から補助金を受けている。

(1) 調査会組織

会 長	林 藤 三	(当時長久手町文化財保護審議会会長)
副 会 長	與 語 義 孝	(" 副会長)
理 事	浅 井 金 満	(長久手町文化財保護審議会委員)
"	青 山 晴 男	(当時長久手町文化財保護審議会委員)
"	伊 藤 勇	(当時 " 委員)
"	佐々木 理	(当時 " 委員)
"	小 林 元	(長久手町文化財保護審議会委員)
"	江 場 琳 豊	(" 委員)
監 事	浅 井 廣	(当時長久手町文化財保護審議会委員)
"	加 藤 孝 雄	(当時・長久手町教育委員会教育課長)
顧 問	宮 石 宗 弘	(当時・瀬戸市歴史民俗資料館長)
調 査 員	赤 羽 一 郎	(愛知県教育委員会文化財課)
調 査 補 助 員	近 藤 勝 波	(当時・愛知県立芸術大学大学院生)
事 務 局 長	浅 井 明 彦	(長久手農業協同組合)
事 務 局 員	加 藤 八 州 夫	(当時・長久手町教育委員会)
" (会計)	川 本 孝 之	(長久手農業協同組合)

(2) 調査参加者

中村 淳、近藤 税、近藤 一夫、近藤 義嘉、早川 一路、太田 淳子
松原 充、浅井 康巳、浅井 常吉、日比野桂子、倉地 知子、青山すず子
青山千代子、青山ユリエ、林 千寿恵、東 登志子、野末 浩之、浅井 好子
小塚 憲二

(3) 調査期間は、昭和60年8月2日から12月13日までの約5ヶ月間である。

(4) 出土遺物の整理は、日比野桂子、青山ユリエ、東登志子、伊藤祥子(当時長久手町教育委員会)がおこなった。また、実測図作成には、野末浩之氏(当時愛知県陶磁資料館学芸員)の協力をえた。

第二次：日比野紀幸氏(うなぎの瓢家)の依頼をうけて、長久手町教育委員会が実施した。

(1) 調査組織

調 査 員	赤 羽 一 郎
調 査 補 助 員	野 末 浩 之
"	近 藤 勝 波
事 務 局	加 藤 八 州 夫・鈴 木 孝 美

(2) 調査作業員

松原 充、浅井 康巳、浅井 常吉、日比野 桂子、青山 ユリエ
速水 敦、丹羽 誠次郎

(3) 調査期間は、昭和61年2月8日から2月15日までの8日間である。

(4) 出土遺物の整理は、おもに野末浩之がおこなった。

第三次：近藤勝俊氏(近藤歯科医院)の委託をうけて、岩作城跡第三次発掘調査会が実施した。

(1) 調査会組織

会 長	林 藤 三
副 会 長	與 語 義 孝
理 事	浅 井 金 満・青 山 晴 男・伊 藤 勇・佐々木 理・ 小 林 元・江 場 琳 豊
監 事	浅 井 廣・加 藤 孝 雄
調 査 員	赤 羽 一 郎
調 査 補 助 員	速 水 敦 (当時・愛知県立芸術大学学生)
調 査 補 助 員	丹 羽 誠 次 郎 (当時・愛知県立芸術大学学生)
事 務 局	鈴 木 孝 美・伊 藤 祥 子

(2) 調査作業員

加藤 春吉、畑 中 富士雄、五 島 柴 夫、山 本 寛、
稲 垣 正 夫、加 藤 光 枝、原 田 實、鈴 木 尙、
川 本 二 巳、金 谷 由 一 (以上、長久手町高齢者能力活用協会)

(3) 調査期間は、昭和61年8月4日から9月4日までの1ヶ月間である。

(4) 出土遺物の整理は、丹羽誠次郎がおこなった。

3 報告書作成にあたり、出土遺物の写真撮影等は柴垣哲彦がおこなった。

4 本書の作成にあたり、出土陶磁の産地同定・年代推定については、名古屋大学文学部教授榎崎彰一氏(現愛知県陶磁資料館総長)及び愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏に、また、甲斐今井氏の系譜については、磯貝正義氏(当時・山梨県埋蔵文化財センター所長)に御教示いただいた。ここに記して謝意を表したい。

5 調査記録および出土遺物は、長久手町教育委員会に保管されている。

6 文化財保護法に基づく手続き等

この発掘調査に係る文化財保護法に基づく諸手続きは、次表のとおりである。

区分	事業者	町教委	県教委	文化庁
第一 次	発掘届 法第57条の2 昭和60年5月2日 長農発第41号 (長久手農業協同組合 組合長理事 水野義朗)	昭和60年5月2日 60長教第533号	昭和60年6月10日 60教文第27-92号	_____
	発掘調査届 法第57条 昭和60年9月12日 (岩作城跡発掘調査会 会長 林 藤三)	昭和60年9月12日 60長教第1174号	昭和60年10月18日 60教文第27-197号	昭和60年10月8日 60委保5-1368号
	埋蔵物発見届 昭和60年12月25日 (愛知警察署)	_____	昭和61年2月5日 60教文第27-197号 (認定通知)	_____
	埋蔵文化財 保管証 _____	昭和60年12月24日 60長教第1550号	_____	_____
第二 次	発掘届 法第57条の2 昭和60年12月14日 (日比野紀幸)	昭和60年12月14日 60長教第1502号	昭和60年12月27日 60教文第27-273号	_____
	発掘調査通知 法98条の2 _____	昭和61年1月16日 61長教第29号	昭和61年4月7日 61教文第27-24号	昭和61年3月26日 61委保2-1237号
	埋蔵物発見届 昭和61年5月23日 (愛知警察署)	_____	_____	_____
	埋蔵文化財 保管証 _____	昭和61年5月15日 61長教第596号	_____	_____
第三 次	発掘届 法第57条の2 昭和61年7月24日 (近藤勝俊)	昭和61年7月28日 61長教第1067号	昭和61年8月6日 61教文第27-175号	_____
	発掘調査通知 法98条の2 _____	昭和61年7月30日 61長教第1092号	昭和61年11月10日 61教文第27-176号	昭和61年10月29日 61委保2-3580号
	埋蔵物発見届 _____	_____	_____	_____
	埋蔵文化財 保管証 _____	_____	_____	_____

目 次

序

例言

第1章 遺跡の地理的・歴史的環境 1

第1節 岩作城跡の立地条件 1

第2節 岩作城跡の歴史的環境 1

第3節 文献・絵図にみる岩作城 2

第2章 第一次調査

第1節 調査に至る経過 5

第2節 調査方法 6

(1) 岩作城跡の範囲・形状の推定 6

(2) グリッドの設定 7

第3節 遺構の検出 15

(1) 土 壘 15

(2) 虎 口 15

(3) 作業場跡 17

(4) 井戸跡 18

(5) その他 19

イ ピット群 19

ロ 第3トレンチ 19

ハ 溝状遺構 19

第4節 出土遺物 20

(1) 井戸跡出土の遺物 20

イ 陶 磁 20

ロ 鉄製品 21

(2) その他の遺構出土の遺物 22

第3章 第二次調査

第1節 調査に至る経過 29

第2節 調査の方法及び遺構の検出 29

第3節 出土遺物 29

第4章 第三次調査 31

第1節 調査に至る経過 31

第2節 調査の方法及び遺構の検出	31
第3節 出土遺物	31
第5章 小 結	33
第1節 検出遺構と出土遺物からみた岩作城跡	33
第2節 岩作城と今井氏	33
遺物観察表	39
参考文献一覧	47
報告書抄録	48

写 真 目 次

写真1	第一次調査区域・井戸跡出土遺物（口絵）
写真2	第一次調査（1）
写真3	第一次調査（2）
写真4	第一次調査（3）
写真5	第一次調査（4）
写真6	第二次調査
写真7	第三次調査
写真8	第一次調査出土遺物（1）
写真9	第一次調査出土遺物（2）
写真10	第一次調査出土遺物（3）
写真11	第一次調査出土遺物（4）

挿 図 目 次

図1	長久手町内の中世城館跡	2
図2	高力種信『長久手安見之図』	4
図3	岩作城跡調査区域設定図	5
図4	岩作城跡付近地籍図(明治18年作製)	6
図5	地籍図・調査区域対照図	7
図6	第一次調査区域現況地形図	9~10
図7	第一次調査区域グリッド設定・遺構検出状況	11~12
図8	第一次調査区域第1~3トレンチ断面図	13~14
図9	第一次調査区域虎口付近の遺構	16
図10	第一次調査区域作業場跡・井戸跡検出状況	18
図11	井戸跡検出状況	18
図12	第一次調査区域出土遺物(1)	23
図13	第一次調査区域出土遺物(2)	24
図14	第一次調査区域出土遺物(3)	25
図15	第一次調査区域出土遺物(4)	26
図16	第一次調査区域出土遺物(5)	27
図17	第一次調査区域出土遺物(6)	28
図18	第二次調査区域トレンチ図	29
図19	第二次調査区域出土遺物	30
図20	第三次調査区域トレンチ図	31
図21	第三次調査区域出土遺物	32
図22	第一次調査区域井戸跡出土遺物の年代観	35~36
図23	甲斐今井氏略系図	37

第1章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 岩作城跡の立地条件

名古屋市を東西に貫通する広小路通を東へ進むと、千種区星ヶ丘を経て東名高速道路の名古屋インターチェンジ入口に至る。東名高速道路をくぐり抜けたあたりが、名古屋市と長久手町との境界である。ここからさらに東へ2.5kmで「古戦場南」と表示された交差点にさしかかる。この一帯は、天正12年(1584)に豊臣秀吉軍と織田信雄・徳川家康連合軍が死闘をくりひろげた長久手合戦の舞台であり、この交差点の北西角にも合戦に敗れた池田勝入(恒興)の墓碑が、小さな木立に囲まれてひっそりと立っている。「古戦場南」の交差点を左に折れ、1.4kmほど北へ進むと「岩作」という交差点に至る。この交差点は、主要地方道瀬戸・大府・東海線が県道田柁・名古屋線に突当たる地点にあたり、この北西角に長久手町役場が所在している。岩作城跡は、この交差点を含み南西方向に広がっている。

ところで、猿投山塊から派生する支陵は、長久手町付近では標高160~100mの低丘陵となり、町域の北部と南部を東から西へはしっており、このうち町の南東に位置する三ヶ峯丘陵を水源とする香流川が、南北の低丘陵の間を流れている。香流川は、前熊地区で神明川を加えて西に流れ、色金山(長久手合戦の折の徳川家康の床机石があるという)と御嶽山の間を狭隘部を通過して、岩作地区に至る。岩作地区では香流川は長湫地区との境界を蛇行しながらさらに西に進み、名古屋市千種区の北辺で矢田川に合流する。岩作城跡はこの香流川の右岸に形成された標高約60mの沖積低地に立地している。

第2節 岩作城跡の歴史的環境

古代尾張東北部に位置していた山田郡は、室町時代末期に廃止され、岩作城跡の所在する長久手町一帯は、愛知郡に属することとなった。その後、天正年間(1573~92)の『信雄分限帳』には、「長くて郷」「くまの針郷」「まへくま針郷」「やさく」の4つの郷名が見受けられる。室町時代末期から戦国時代にいたる混乱期の長久手町一帯の領有関係は詳らかでないが、天正年間には織田領に組み込まれていたことが知られる。この織田領であった長久手町一帯で、天正12年(1584)に長久手合戦が展開される。

徳川家康の本拠地岡崎を急襲すべく犬山から尾張平野の東北辺を迂回して南下した秀吉軍の動向は、小牧山に陣取っていた家康に看取されていた。家康らの追撃軍は、丹羽氏次の立てこもる岩崎城の抵抗に足止めを余儀なくされていた秀吉軍に容易に追いつき、これを打ち破った。今日、これらの戦跡は、「長久手古戦場」(附・御旗山、首塚、色金山)として国史跡に指定されている。岩作城跡は、この長久手古戦場(大字長湫字仏ヶ根、武蔵塚等)の北方1.4kmに位置している。また、同城跡の南西0.7kmには御旗山(大字長湫字富士浦)、北東0.8kmには家康が戦況を展望したという色金山(大字岩作字色金)、東0.4kmには合戦の死者を葬ったとされる首塚(大字岩作字元門)が同城跡を取り囲むように位置している。

しかしながら、長久手の合戦の中心地に位置していながら、また後に述べるように、天正年間も居住空間として機能していたと考えられるにもかかわらず、岩作城跡の当時の様子をいかなる合戦記等でも知ることはできない。

さて、長久手町内には、この岩作城跡のほかに幾つかの城館跡の所在が知られている（図1）。まず同城跡の南西1.1kmには長久手城趾（城屋敷）がある。原状は既に失われているが、東西二つの方形郭からなる平城であったという。また、城主の加藤太郎右衛門は小牧・長久手の合戦の折は織田・徳川軍に組し、岩崎城で戦死したと伝えられる。

また、岩作城跡の西0.6kmの大字岩作字藪田には、岩作西城があったと想定されている。しかし、現況はもちろん、明治18年の地籍図でもその所在を確認することはできない。一方、同城跡の東約1.6kmには大草城跡（大字熊張字郷前等）がある。1987年の地形測量調査では、城跡の南西部分に大規模な空堀と土塁が認められた。この大草城跡に係わる史料類も皆無に等しい。

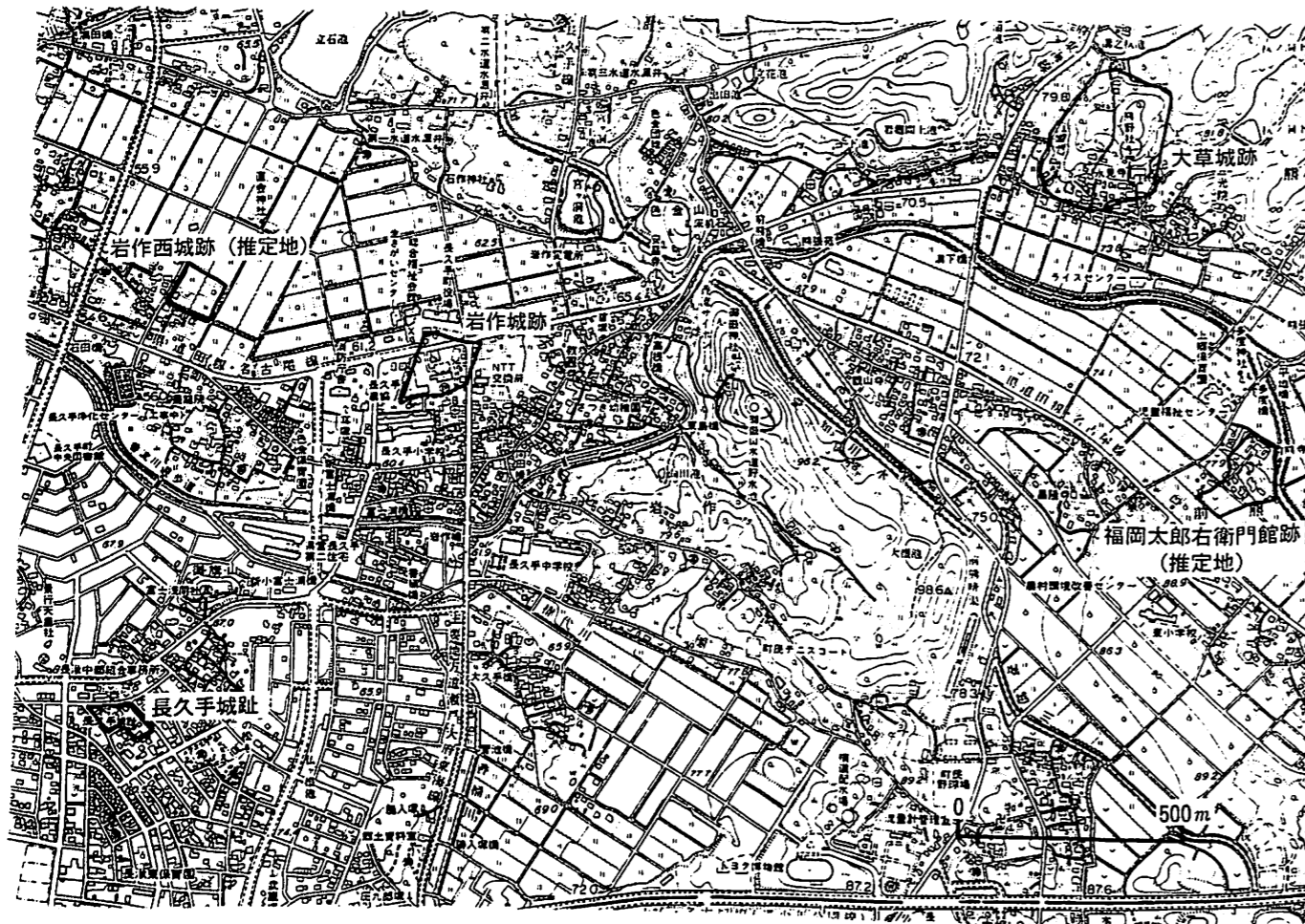


図1 長久手町内の中世城館跡

第3節 文献・絵図にみる岩作城跡

(1) 『寛文村々覚書』（成立：寛文〔1661～73〕末年）

— 古城跡 先年今井五郎太夫居城之由、今ハ畑ニ成。

(2) 『張州府志』（成立：宝暦2年〔1752〕）

〔岩作城〕在岩作村。古簿曰。今井五郎大夫者居之。然土人今無識其姓名者。

(3) 『尾張徇行記』（成立：文政5年〔1822〕）

— 古城跡二区、一ツハ今井四郎兵衛居之、当村東畠ニアリ、其跡一反二畝歩也、又一ツハ鈴村権八居之、当村西畠ニアリ、其跡一反廿歩也

(4) 『尾張志』（成立：天保14年〔1843〕）

岩作東城

岩作むら東島といふ民戸の西の方に屬する地にてこの字を城の内といふ也四面に土居の形猶残れり土居幅二間つ、あり土居を省て東西四十四間南北三十二間あり地方覺書に今井四郎兵衛居之當村東畠にあり其跡一段二畝歩也とある是なり郷人今も其名を知れり天正十二年四月九日岩崎籠城戦死の士に今井四郎三郎といふあるは四郎兵衛の子などにやありけむ

(5) 『愛知郡誌』（成立：大正12年〔1923〕）

岩作城跡。長久手村大字岩作に在り。東西二所、東城跡は村の東方字城の内に在り、地稍高くして、東西四十四間、南北三十二間許、今悉く居地たり。其の西側細長の溜池あり、里人称して右外壕の残れるものなりと云ふ。地方覺書に往昔今井四郎兵衛之に居る、當村東畠にあり、其址一段二畝歩と記せること、及び里人猶其名を傳ふること、尾張志に載す、然れども今其傳を失し、村里其の名を知るものなし。

(6) 『岩作里誌』（成立：大正13年〔1924〕）

……又尾張古城誌に岩作村今井五郎太夫あるは、東西何れの城主か詳かならず、亦四郎兵衛の族か將た異名同人か今徴し知る可からず。〔以上舊郡誌〕 里説には往昔年年貢米事件激論の末村内某の遠祖先が先頭に立ち城主を殺せしと傳ふ。但安昌寺記録及び過去帳に同人見えず、且つ本村の城主にして佛餉料寄附品等も更に見えざるは天正以前に全滅せし事明瞭也、同時今井を名乗りしものは春日井郡上條の城主も有りて、岩崎籠城の今井は何れの族か判明しがたし、又郡誌に其傳を失して其名を知る者無しと掲げたるは、同誌編纂の際探索する者の古傳を知る人に當り得ざりしなり、今此僻地里人の故事に配慮するは實に僅少也……。



図2 高力種信『長久手安見之図』

高力種信は（～1831）は尾張藩士で、猿猴庵と号した文化人であった。長久手古戦場を訪れたことを記念して、文化3年（1806）に岩崎（現：日進市）から岩作の範囲を俯瞰図として描いた。中央上部に、田んぼのなかに方形の地割りを見せているのが、岩作城跡と思われる。

第2章 第一次調査

第1節 調査に至る経過

岩作城跡は、地名からも推察されるように、愛知郡長久手町の中心部にあたる大字岩作字城の内にあり、また田圃のなかに土塁の一部分が残存していた。しかし、後述するように、城跡は現在では田畑・宅地・道路と化し、地元でもその存在を知る人は決して多くはなかった。昭和60年5月2日付けで、この岩作城跡を含む地域約11,300㎡に長久手農業協同組合が店舗・倉庫・駐車場を建設する旨の発掘届が提出された。長久手町教育委員会は愛知県教育委員会文化財課とともに長久手農業協同組合と、5月31日、6月5日の二回にわたって協議を重ねた。その結果、土塁を始めとする岩作城跡の遺構の現状保存は不可能であり、発掘調査を実施し、記録保存に努めることで合意した。その後、岩作城跡発掘調査会が結成され、8月2日から発掘調査区域の除草、地形測量がおこなわれた。8月26日にグリッドを設定し、発掘調査が開始された。

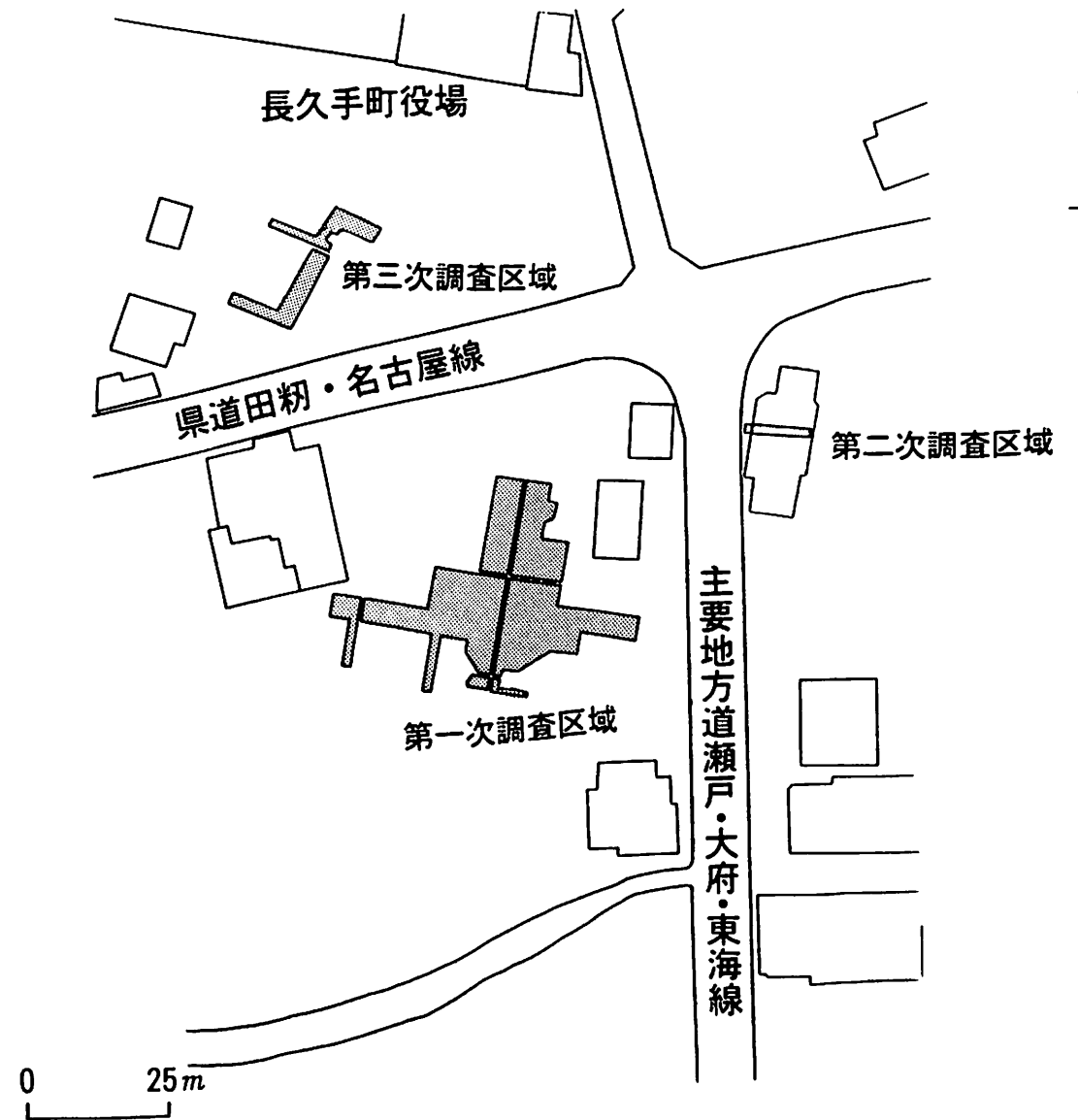


図3 岩作城跡調査区域設定図

第2節 調査方法

(1) 岩作城跡の範囲・形状の推定

現存する岩作城跡は、田圃の中に残る土塁の一部と、「城内」という小字によってわずかにその存在が知られるが、大半は田畑・宅地・道路によって占められている。この城跡の範囲・形状を知るうえで有効な史料として、明治18年（1885）に作成された当地の地籍図をあげることができる。この地籍図に記載されている地目のうち、畑及び草生地の部分を表示すると、図4のようになる。この図によって、次のことが推定される。①土塁及び居住空間が後世に畑に転用されている。②北辺西寄り、西辺、及び南辺にみられる細長い畑の部分は、土塁であり、それらの内側の田圃の部分は水濠（堀）である。南辺の畑の断絶部分は、「虎口」と考えられる。③居住空間は、中央東寄りの細長い田圃（水濠）によって二分されている。④北西角の畑と田圃部分の在り方は、池を取込んだ庭園を思わせるが特定できない。⑤土塁の外側の水濠は、北及び西辺の畑部分（土塁）と水路によってはさまれた田圃の部分と考えられる。西辺南寄りの池も水濠の名残であろう。南及び東辺では明瞭に水濠と考えられる地割は、確認できなかった。

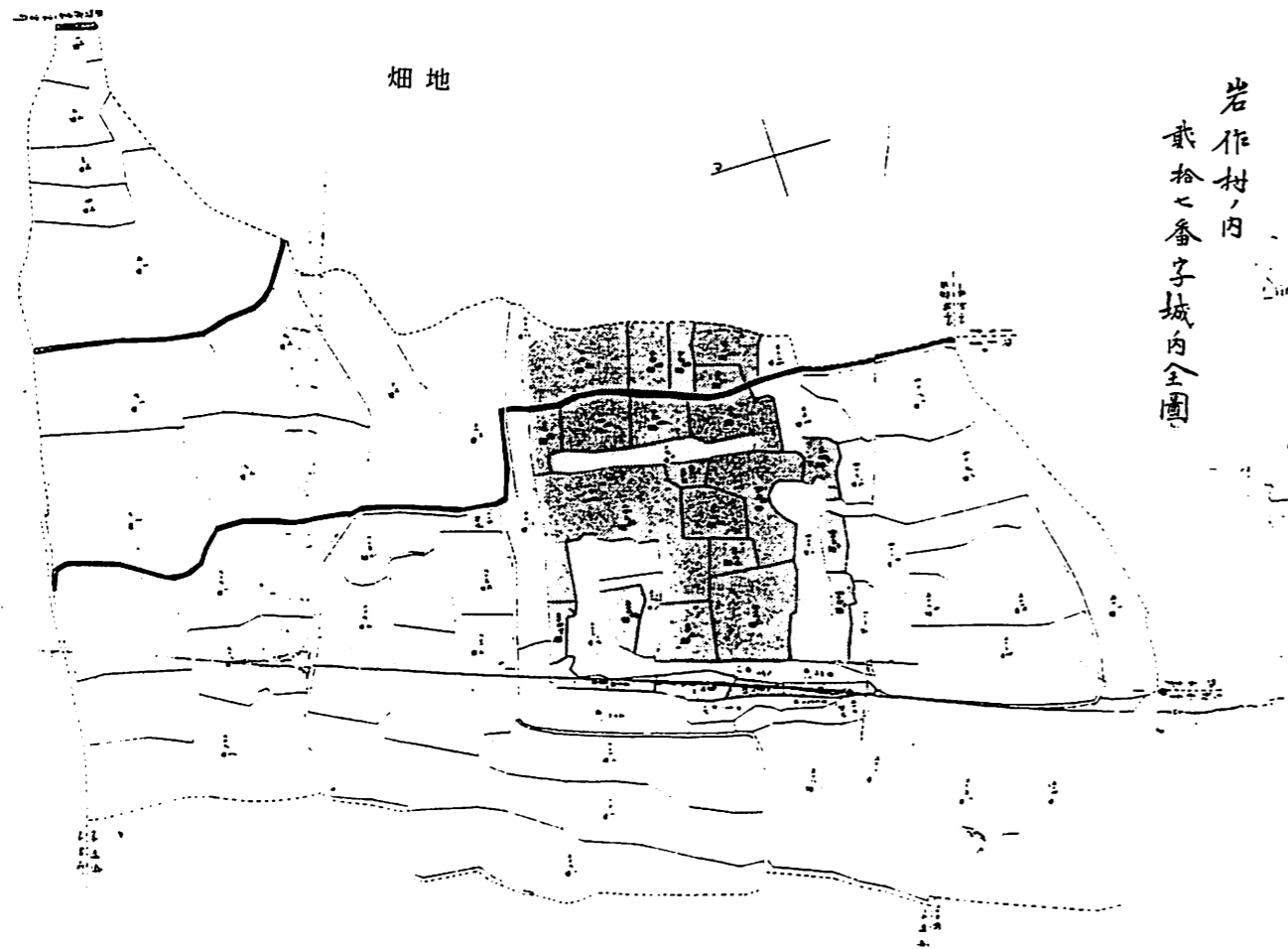


図4 岩作城跡付近地籍図（明治18年作製）

ところで、地籍図にみられる畑の部分（土塁の内側）の長さは、概ね東西78m・南北60mであり、『尾張志』に記述されている東西四十四間（約80m）、南北三十二間（約58m）、土塁二間幅（約3.6m）という数値に符合している。このように、岩作城跡は、土塁と水濠とによって周囲から隔絶された方形単郭構造のプランを示していることが推定される。

なお、このように推定すると、長久手役場の前面に位置する三角形の私有地、「岩作」交差点北東角の宅地裏側の段差は、各々岩作城跡の北西角、東辺の一部を表していると考えられる。

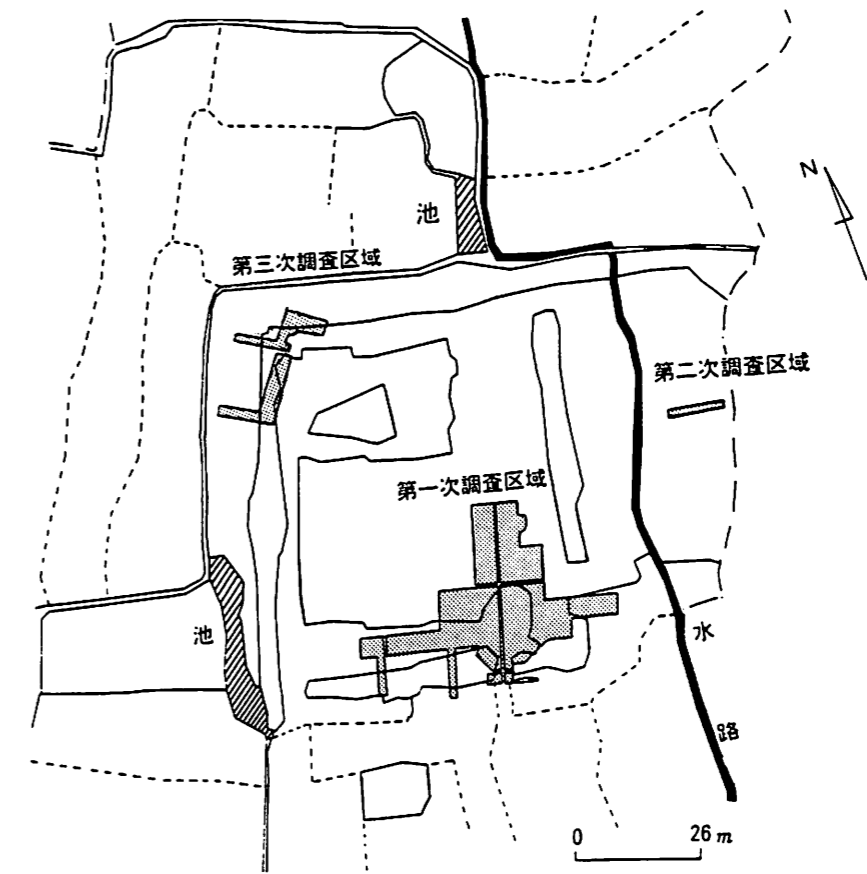


図5 地籍図・調査区域対照図

(2) グリッドの設定

推定される岩作城跡の範囲のうち、長久手農業協同組合の開発事業にかかる部分は南辺土塁とその内側の水濠、及び居住空間の一部である。地番としては、字城之内 23, 24, 25, 27, 42, 43, 44, 47 番地が該当する。このうちの発掘調査可能な区域（約800㎡）にグリッドを設定した。原則的には、南北5m・東西4mの法眼とし、その名称は北→南をA・B・C・・・、西→東を1・2・3・・・で表示することとした。

このほか、土塁の構築の状況を知るために、南辺土塁の二箇所を1.5m幅でタチ割り、さらに0.5m幅のサブトレンチ（a-a'、b-b'）を設定した。また、F-9, 10, 11区にも1m幅のサブトレンチ（c-c'）を設けた（図7）。

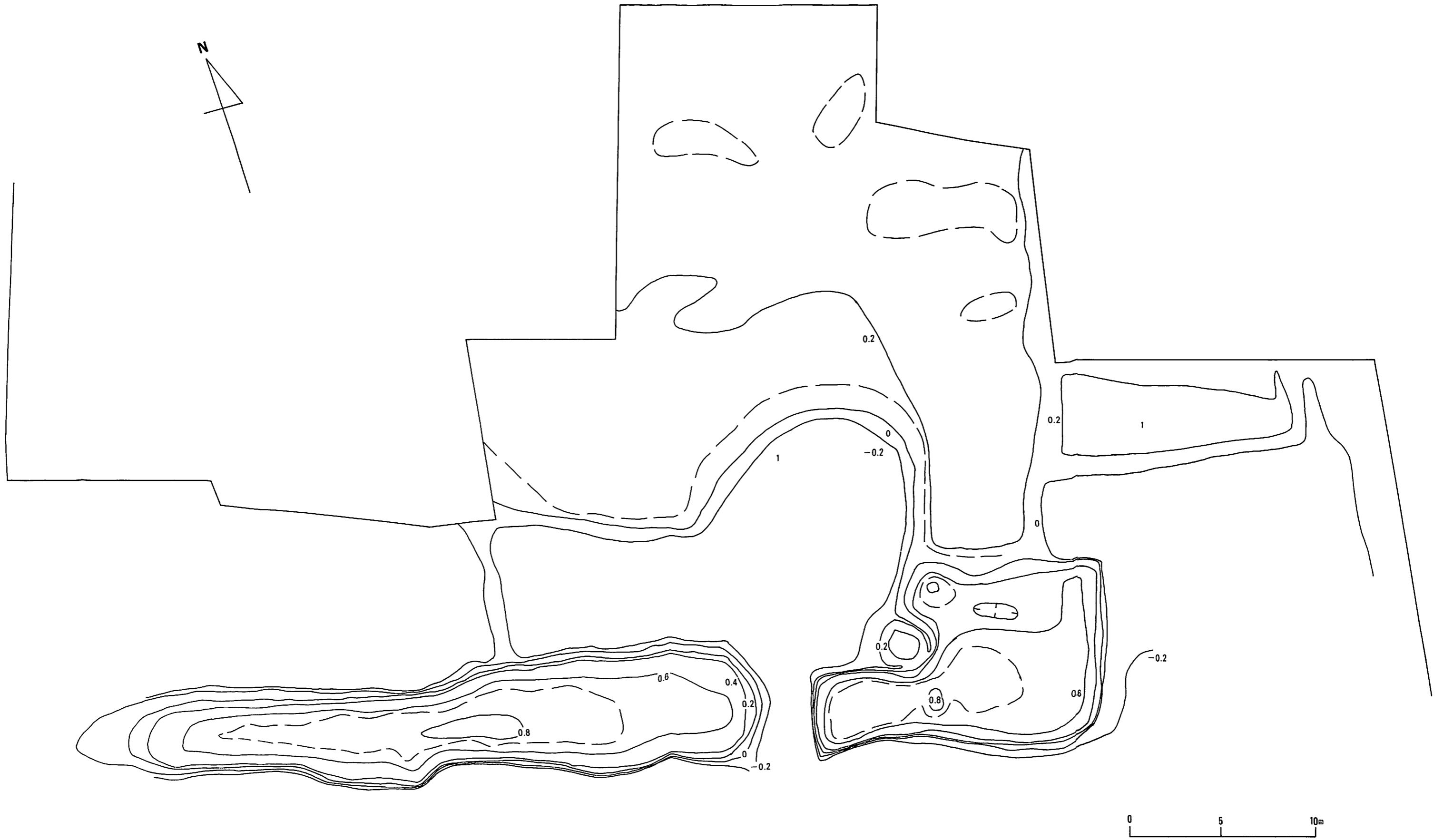


図6 第一次調査区域現況地形図

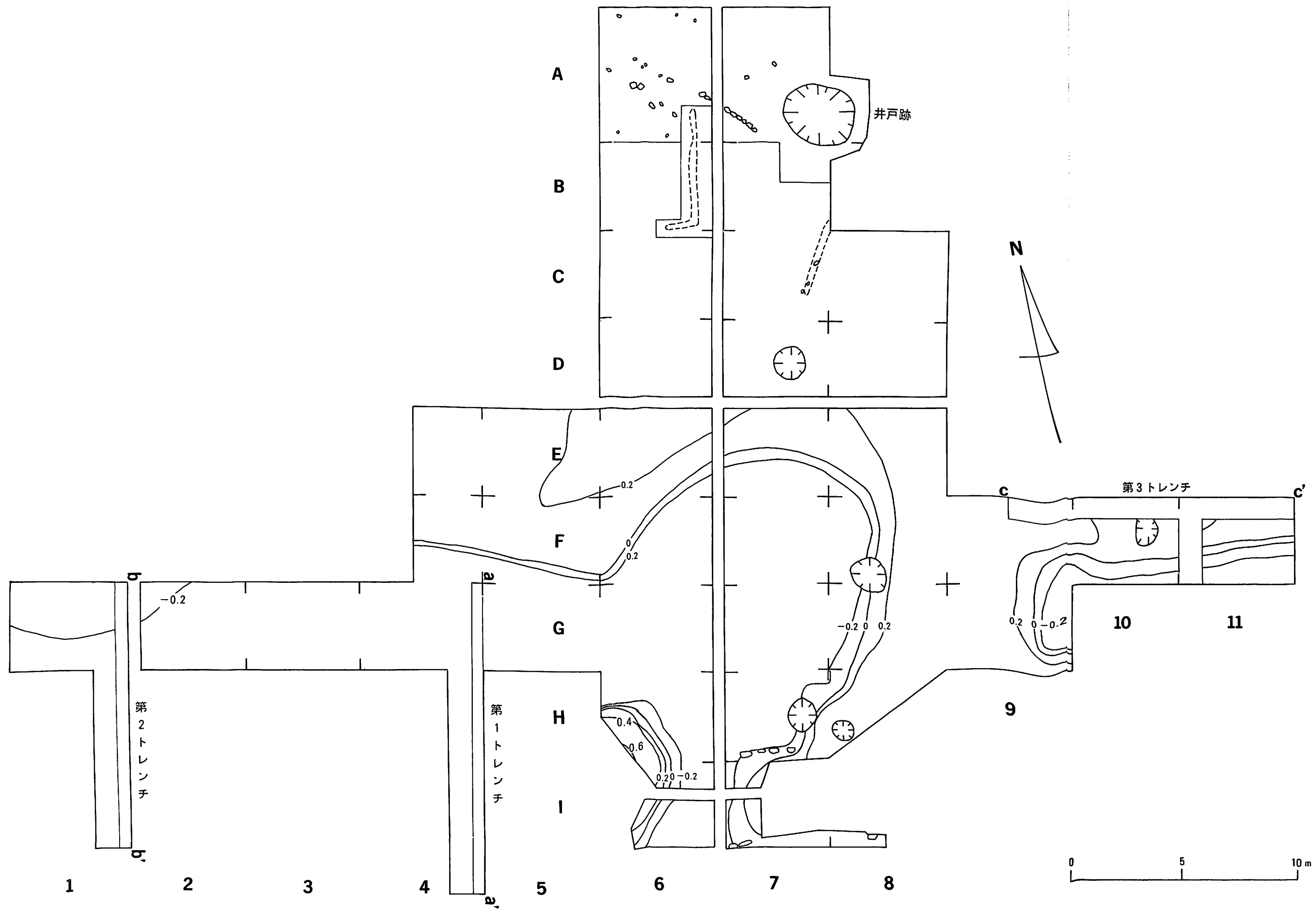


図7 第一次調査区域グリッド設定・遺構検出状況

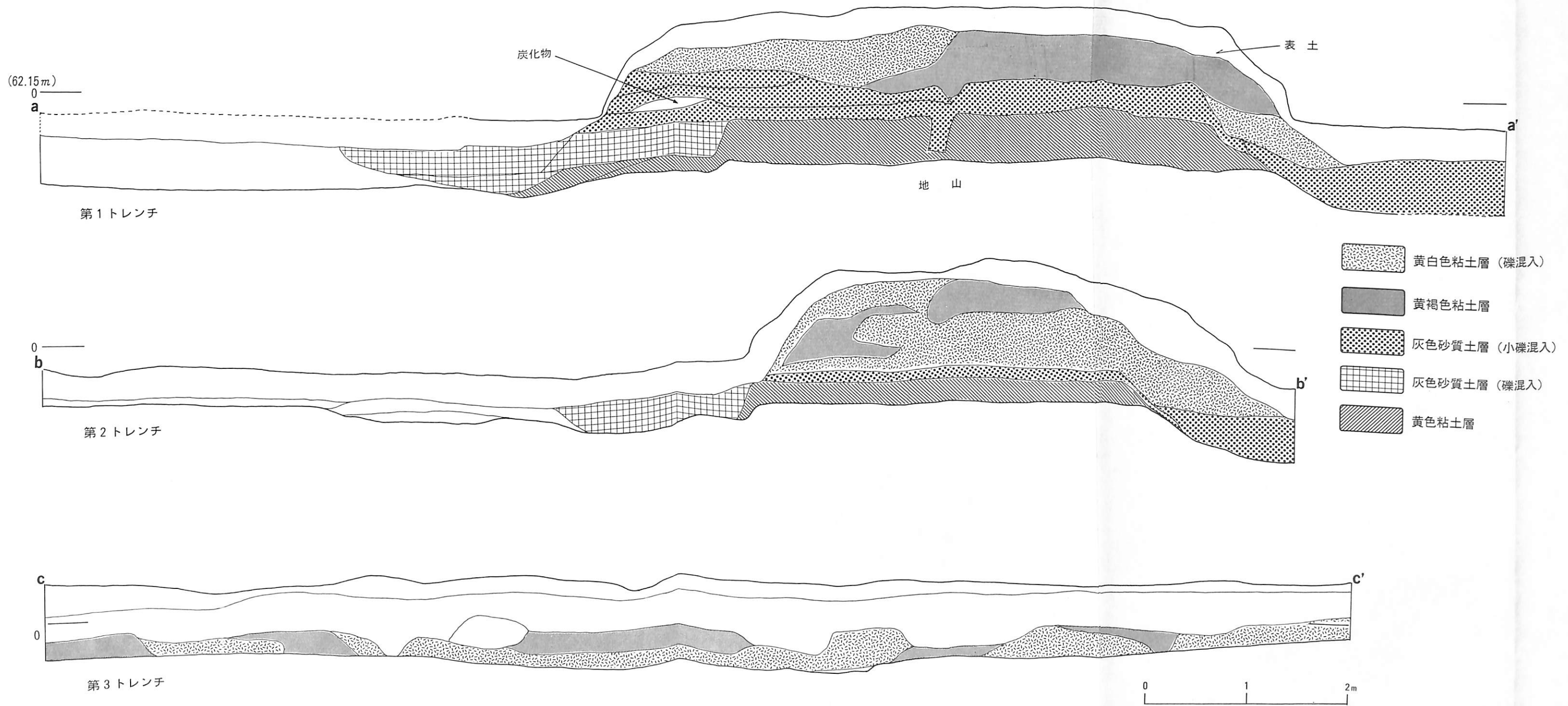


図8 第一次調査区域第1~3トレンチ断面図

第3節 遺構の検出

(1) 土 壘

現存する土壘は、方形プランを示す岩作城跡の南辺を表しており、その長さは53m、幅は最も広い部分で7mを測る。その外観はカマボコ状を呈し、田圃耕作面との比高は平均して+1.0mであるが、西に向かって次第に細く、また低くなっていく(図6)。

明治18年の地籍図では「畑」と記載されているが、現状では耕作の痕跡は認められず、表面はヤダケで覆われている。ただ、土壘東端の頂部に、江戸時代後期(18世紀後半)と推定される常滑大甕が埋設されており、これを蓄肥容器とみれば、従来畑として利用されていた土壘の表面に、後に崩壊を防ぐためにヤダケが移植されたとも考えられる。

さて、この土壘の構築の状況を確認するために、二か所で土壘をタチ割ってみた(図8)。第1トレンチは、虎口から西へ約10mの所に設けた。土壘のタチ割の結果、表土は20cm内外の厚さで土壘の表面を覆っていた。第二層は、こぶし大の礫を含む黄白色粘土と黄褐色粘土からなっている。前者には、若干の江戸時代後期の近世陶磁が混入しているが、両者の層序は明確ではない。第三層は、灰色の砂質土干の江戸時代後期の近世陶磁が混入しているが、両者の層序は明確ではない。第四層は土壘内側にみられ、黄褐色で小石を多く含んでいる。混入遺物としては15世紀代の陶磁がある。第五層は、混色の砂質土でこぶし大の礫を含んでいる。この層には16世紀前半の陶磁が混入していた。第五層は、混入物のほとんどみられない安定した黄色土層であり、上面のほぼ中央部に幅20cmほどのピットの断面が検出されたが、遺構に結びつくものかどうかはわからない。

第2トレンチは、第1トレンチの西方15mの箇所設けた。タチ割の状況は、表土層から第五層に至るまで、その幅を除けば第1トレンチとほぼ同様である。

このような土壘断面の様相から、次のことが推定される。第二層は、二種類の土砂が混在しており、近世末以降に土壘修復、あるいは崩落した土砂を盛上げ、畑を整えたと思われる。第三・四層を区分したが、礫の有無を除けば同質である。15~16世紀代の陶磁が混入していることから、16世紀以降に存在した土壘を形成した土砂であろう。第五層の黄色土層は、その形状から土壘の底部と思われる。上面の幅は第1トレンチで4.7m、第2トレンチで3.7mを測り、「尾張志」にいう幅二間には後者が近い。現況の土壘は第1トレンチの箇所においては内・外へ、第2トレンチの箇所においてはおもに外へ拡大されており、その土層の形状から土壘内側から外側に向かって土砂の盛上げがなされたと思われる。

(2) 虎 口

第1章第3節で載せた『長久手安見之図』(図2)は、文化3年(1806)に猿猴庵が長久手合戦の地を描いたものであるが、香流川の北側に方形の「島畑」状の区画がみられる。周囲の位置関係から、詳細は分りにくいものの、これが既に田畑と化した岩作城跡であろう。この岩作城跡とおぼしき方形の区画のほぼ中央から南に延びる道が認められる。この道の付根が岩作城の「虎口」と考えられる。明治18年の地籍図では、虎口の部分と同じ地籍が南に延び、さらに道の西側のラインと思われる地割が続いている。

さて、虎口の部分(H-6・7区、1-6・7区)の調査では、表土層を削除し土壘の黄褐色粘土層

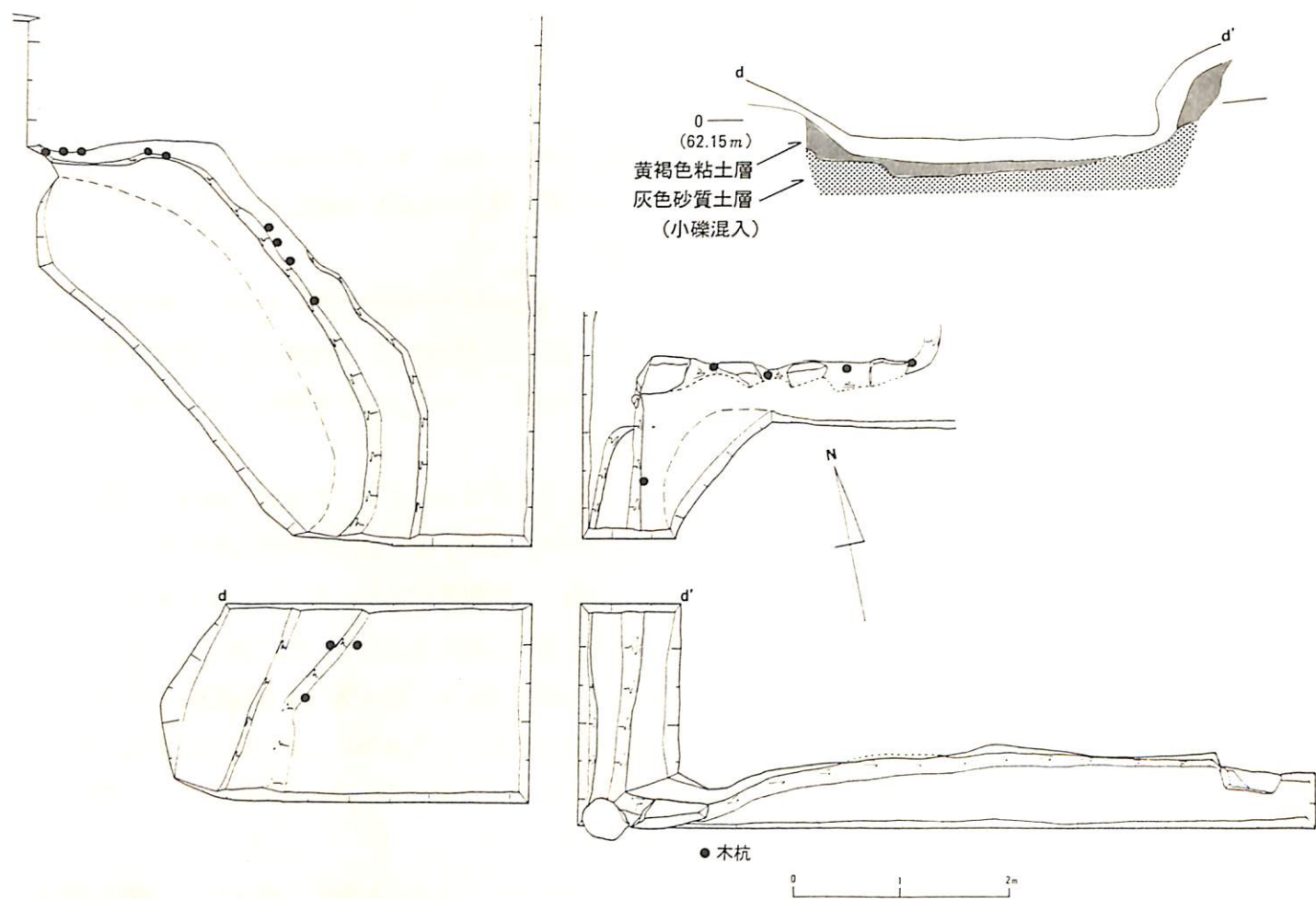


図9 第一次調査区域虎口付近の遺構

(第二層) 上面を露出した(図9)。その結果、土塁の裾は現況と同じく虎口の西側では丸く膨らみ、東側では矩形を呈していた。また、西側土塁では北東及び南東の裾に並んでいる木杭を、東側土塁の北面では、4個の花崗岩の列とその間の木杭が検出された。さらに、東側土塁の南西隅に2個、南辺東寄りに1個の花崗岩が検出された。木杭は、太さ約6cm、長さ50cm内外で、比較的良好な原形を保っていた。これらの木杭と花崗岩が、岩作城が城館として機能していた時期の土塁の構築に係わるものとの期待もあった。しかし、これらの花崗岩は後述する居住区域で検出された石材とは異質のものであり、また、西側土塁の北東の丸く膨らんだ裾に沿って木杭が打込まれていたことは、後世に崩壊しつつあった土塁の修復のためにこれらが用いられたことを推測させる。現に、地元の人々の記憶によれば、明治年間の後半に土塁の修築がおこなわれたとのことである。虎口の中央部分の断面(d-d')は、20cm程の表土層の下に西側土塁からの崩落土砂と思われる黄褐色粘土層、さらに小石をまじえた灰色砂質土層が横たわっている。地山については、湧水のため確認することはできなかった。

なお、虎口内側の田圃部分は楕円形を呈しており、元来の水濠を表したのか、あるいは上述の土塁修復のための土取りの痕跡かは明らかでない。この田圃部分の表土(耕作土)の下部は、礫を含む黄褐色の粘土層であり、遺物の混入は見られなかった。

(3) 作業場跡

明治18年の地籍図によって、土塁内側の畑の部分居住空間と推定し、グリッドをその調査可能な範囲に設定したが、層序の把握に手間取り、与えられた期間のなかで遺構面まで調査することができたのは、A-6・7区であった。

このA-6・7区の調査によって確認された居住域の基本層序は、次のとおりである。

第I層：表土層………岩作城跡は、その機能を失った田畑として永く活用されてきた。その間の耕作土がこれにあたり、平均20cmの厚さで色調は灰黒色である。混入している陶磁であるが、大半が細片である。

第II層：灰褐色土層………A-6、B-6及びC-7区の表土層を削除した面上に極めて浅い溝状遺構が検出された。この溝状遺構をとどめている土層は厚さ約20cmで灰褐色を呈し、16世紀代を中心とする陶磁を多く含んでいる。いわゆる遺物包含層である。

第III層：地山層………黄褐色礫層

さて、A-6区では、比較的大型の礫4個と小形の石10数個が地山面に配されており、それらの周囲から不定形のピットや、炭が混じった焼土が検出されている。大型の礫は、ホルンフェルスであるが、岩作城跡の東方の色金山・御嶽山付近に露頭しているものが使われたものと思われる。大型のホルンフェルスは、後述する井戸跡からも大量に発見されており、岩作城が城館としての機能を失い整地された時に投棄されたものと考えられる。これらが建物の礎石である可能性はあるが、当区で検出された大型礫は、現存の位置関係からは礎石とは考えにくい。また不定形のピットを礎石が抜き取られた痕跡とみることも難しい。さらに焼土中の炭は楢〔ほた〕であり建材の炭ではない。このことから、当区の様相を積極的に建物跡とみることはできない。ただし、不定形のピットによって分断された形で三和土が残っており、建物跡の可能性も否定しきれない。ここでは、楢〔ほた〕炭を含んだ焼土の存在から、火を使用したある種の作業場と考えておきたい(図10)。

これらの遺構面から発見された遺物は、美濃・瀬戸窯産の天目茶碗や播鉢の小片、無釉碗、陶丸であるが、遺構の性格を示唆するものではない。

ところでA-6区的大型礫、不定形ピットや三和土などが残る上記の遺構面の東端から南東にはほぼ一直線に延び、A-7区には入り込んだ長さ約3mの中形礫の列が検出されている。この礫列の石質もホルンフェルスであり、両端や中間部に礎石となる大型礫がみられないものの、建物の地貫を支えるものとも考えることができるが断定はできない。

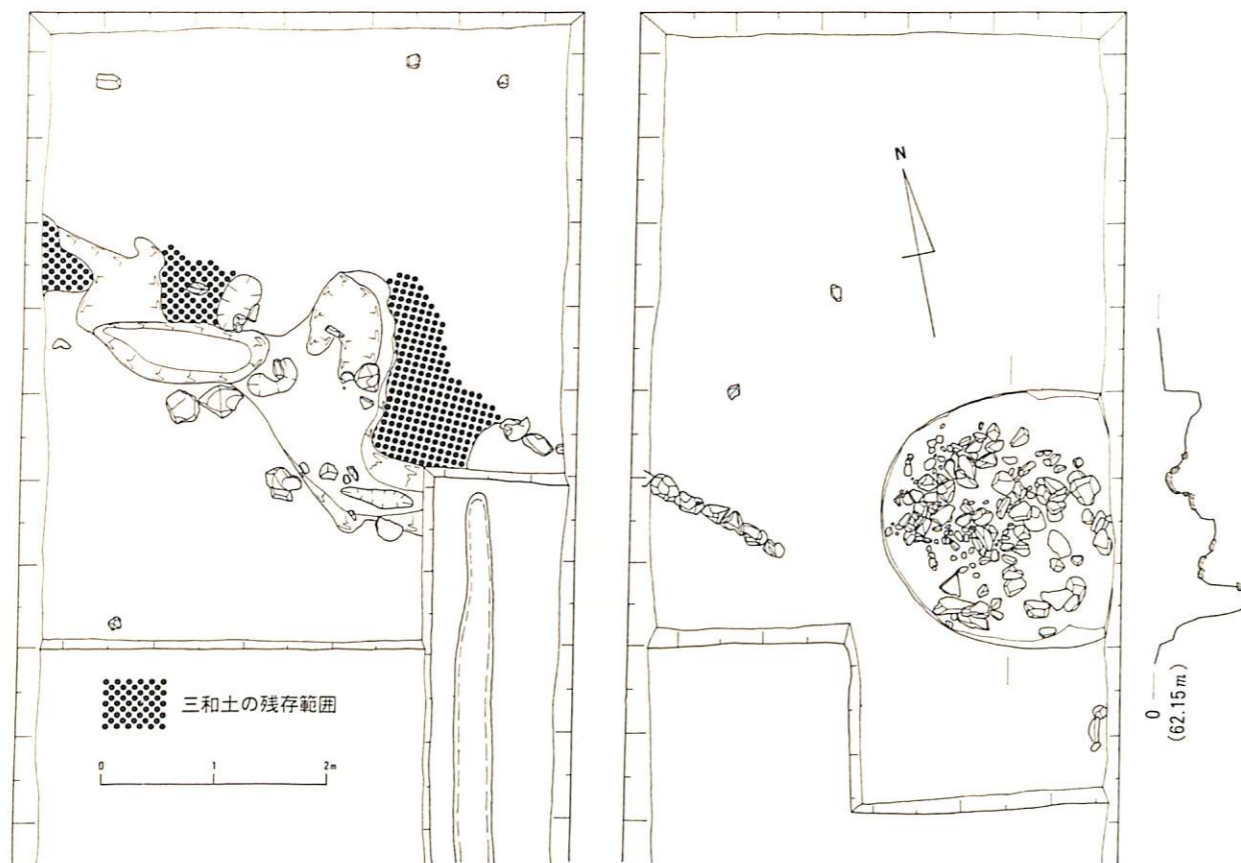


図10 第一次調査区域作業場跡・井戸跡検出状況

(4) 井戸跡

A-7区の南東隅の遺物包含層を削除した段階で、短径2.6m、長径2.9mの大型ピットと考えられ

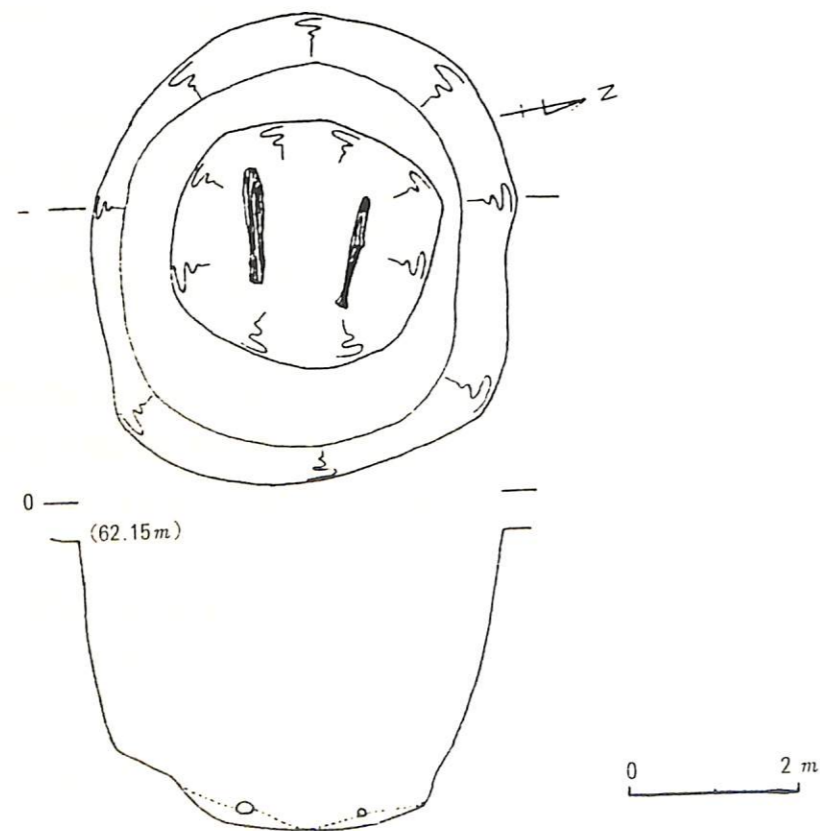


図11 井戸跡検出状況

る輪郭が検出された。そのピット内には、大小の礫が散在していた。このピットを井戸跡と想定し、慎重に掘進したが、ピット内の礫は、井戸の側壁にみられる石積みを表しているとは思われなかった。無秩序に積み重なった礫を除去した結果、深さ2.05m、底辺径1.55×1.65mの掘抜き井戸跡が現れた(図11)。底面の直上からは、長さ70cm、直径20cmと10cmの2本の丸太がほぼ平行に横たわって発見されている。この丸太が、使用されていた時期の井戸に係わるものか、岩作城が廃棄された際多くの礫とともに投棄されたものかは定かでない。底面は、砂利で覆われており、測図が困難なほど地下水が勢いよく湧き出てきた。

井戸跡からの遺物は、無秩序に積み重なった礫にはさまった状態で発見されており、礫などとともに投棄されたものと考えられる。遺物の大半は陶磁であり、須恵器、瀬戸、美濃窯製品、土師質土器さらには中国陶磁もみられた。このほか、性格不明の鉄製品もわずかながら発見されている。

(5) その他

イ. ピット群

発掘区域には、直径1.0~1.5mのピットが5か所みられる。これらのうち、D-7、F-10、H-7・8区のピットは、いずれも深さが50cmであり、またそれらの上端が第II層上面で検出されていることから、時期は特定できないが岩作城が廃棄されたのちのものと思われる。おそらく灌漑用の水溜ではなかろうか。一方F-8区のピットは、直径1.5m、深さは約2mで、他のものに比べて規模が大きい。ピットの中は砂利で満たされており、須恵器、中世瀬戸窯の匣鉢片、近世・代の陶磁片が混在していた。しかし、このピットも第II層の上面で検出されており、岩作城にかかわるものではない。地元古老の話によると、岩作地区では第二次世界大戦以前に、さかんに亜炭採掘がおこなわれており、このピットも亜炭採掘坑ではないかということであった。

ロ. 第3トレンチ

発掘区域の東端F-9~11区幅1m長さ12.5mのサブトレンチを設けた。この区域は字城の内20番地に属しており、明治18年地籍図では畑として記載されている。しかし、地割りが不自然なうえに、第I層(表土層)が他区に比べて薄い。このため、かつては田圃、というよりも岩作城の水濠であった可能性もあるとして設定したものである。

調査では、第I層(表土層)は東に進むほど薄くなり、第II層(灰褐色土層)がその下に横たわっているものの、地山直上には黄白色粘土(礫混入)層・黄褐色粘土層、及び礫塊が入乱れて乗っていることが判明した。このことは、元来岩作城の水濠であった当地域が後世に(おそらく土塁の第二層に対応する近世末以降)埋立てされたものであることを推測させる。

ハ. 溝状遺構

先にA-6、B-6、及びC-7区で浅い溝状遺構が検出されたことに触れた。この溝状遺構は2本検出されており、ひとつはA-6区の南東隅から一直線にB-6区に達し、同区の南辺で西へ90°屈曲している。いまひとつはC-7区の北東端から南南西に2.5mほど延びており、その南寄りに中形の礫が3個発見されている。いずれも、幅約30cm、深さ3cmであり、第II層に掘り込まれたものの残存遺構と思われるが性格は不明である。

第4節 出土遺物

(1) 井戸跡出土の遺物

調査区A-7・8区で検出された井戸跡から多くの礫が発見されており、その大半がホルンフェルスでありカット面のみられる30cm立方前後のものももっとも多いが、長さが60cmを超える大型のものも若干見受けられた。これらは、発掘調査面積が狭かったため断定はできないが、岩作城が廃絶になった際整地のために投棄された居住区域の建物の礎石の可能性もある。これらの礫の間に挟まった状態で、多くの陶磁片、鉄製品が発見されている。

イ. 陶磁

〔古代の陶器〕

井戸跡から発見された陶磁のうち古代に製作年代がさかのぼるものは、須恵器坏蓋(図12-1)と灰釉瓶(水瓶か)(図12-2)である。双方とも猿投窯製品であり、折戸10号窯式(8世紀後半)に比定される。これらは直接的に岩作城跡に係る遺物と見ることはできないが、長久手町東南の丘陵に点在する古墳が示すように、古くから香流川流域に開発が及んでいたことがうかがわれる。

〔中世陶磁〕

中世の陶磁器として、まず中国陶磁について触れておくが図12-7・9・11・12はいずれも、龍泉窯系の青磁碗である。このうち、図12-9には鎬蓮弁文が認められ、また図12-11の碗では見込みに陰刻花文が配されている。

土師質土器では、底面に糸切痕を残した厚手の皿(図12-3、図16-5)と内耳鍋(図12-4)、さらに羽釜(図12-6)が見られる。このうち、土師質皿内面には油煙の痕跡が認められ、灯取りとしても用いられたことをうかがわせる。内耳鍋の内面には櫛目状の成形痕があり、外面には煤が厚く付着している。

図16-4は、美濃窯の山茶碗であり、器壁は薄くわずかに高台を残している。図12-17~21、図13-10、図16-6等は、緻密な粘土を用いた薄手の皿で、内面に同心円状の隆文帯をもち、底面に糸切痕を残しているものである。中世山茶碗の終末的形態を示しているが、その用途・時期は詳らかでない。

次に、瀬戸・美濃窯の鉢類を取り上げておく。図13-1の片口鉢は、肥厚化した口縁端部に沈線がめぐり、外面下部に横削りの痕跡が認められ、古瀬戸中期(前)の14世紀前半に位置づけられよう。図13-2の鉢は胎土に砂粒が混入し、外面下部に縦削りの痕跡がある。また、側面が外反し口径に較べて高台径の小さな編笠タイプであり、古瀬戸中期(後)の14世紀中葉に比定される。また、図13-3・4の折縁深皿と灰釉鉢は共に古瀬戸後期(前)の15世紀初頭に、図13-5の内面の磨耗跡が顕著な灰釉三足盤は、古瀬戸後期(後)の15世紀中葉におくことができる。

図13-8は、陶丸であり、古瀬戸中期(前)以降に位置づけられる。長久手古戦場の故地に因んで火縄銃の弾丸とする向きもあるが、首肯はしかねる。

〔大窯製品〕

瀬戸・美濃窯において戦国時代に集中的に生産された大窯製品の年代観は、近年の城館跡の発掘調

査事例の増加に比例してその精度を高めている。岩作城跡出土の遺物のなかで瀬戸・美濃窯の大窯製品の占める割合は極めて高い。ここでは、次の年代観に従っておくこととする。

- ・大窯第1段階 1485~1520
- ・大窯第2段階 1520~55
- ・大窯第3段階 1555~90
- ・大窯第4段階 1590~1610

井戸跡から発見された瀬戸・美濃窯の大窯製品では、まず天目茶碗(図14-1~12・14・15)が目される。図14-1・2は、口縁部の鋭い立ち上がりと下胴部の鉄釉(鬼板)塗布に特徴があり、大窯第1段階に比定される。また、図14-3・4は鬼板塗布とともに口縁部下部の締めつけが見受けられ大窯第2段階に、図14-5は鬼板塗布された高台脇の幅広い輪高台から大窯第3段階にそれぞれ属するものと考えられる。さらに図14-6・7では下胴部の鬼板塗布は見られず、特に図14-7はその内反高台と偏平化した器形から大窯第4段階に比定することができよう。

小皿類については、口縁部が緩やかに外反している図15-1の灰釉端反皿が大窯第1段階に、続いて図15-2の鉄釉皿が大窯第2段階に比定される。図15-3~6は内禿皿で大窯第3段階に、また図15-7~9・11の志野皿及び図15-12の鉄釉小皿は大窯第4段階に属すると思われる。

井戸跡から発見された大窯製品ではすり鉢の破片も少なくないが、時期を特定しうる個体には恵まれていない。図13-11と12は口縁部を欠くが器面に塗布された鉄釉(鬼板)の発色から各々大窯第1段階、第4段階と推定された。一方、口縁部が残存している図13-6は、上下に延びた縁帯の幅から大窯第2段階と比定されている。

この他の器種では図14-17の鉄釉水滴が大窯第2段階に、図14-18の鉄釉仏花瓶が大窯第1段階に、図14-19の黄瀬戸向付、図15-13~15の志野菊皿と図15-16の志野皿が大窯第4段階に比定されている。また、図16-1・3の鉄釉甕は大窯第1段階、同じく鉄釉甕の図16-2は大窯第2段階に、さらに図16-7の鉄釉瓶は大窯第1段階にそれぞれ比定されている。

〔登窯製品〕

17世紀初頭に瀬戸・美濃窯に連房式登窯がもたらされ、生産効率の向上と多種多様な陶磁器の生産が可能となった。岩作城跡の井戸跡からも多くの登窯製品が出土している。

登窯製品の年代観も、以下に従っておく。

- ・登窯第1段階 17世紀前葉
- ・登窯第2段階 17世紀中葉

この井戸跡から出土した天目茶碗のうち登窯製品であるものは図14-8~12、14・15である。そのうち登窯第1段階のものは8・9・10の三点であり、他は全て登窯第2段階である。また、皿類では、鉄絵の見られる図15-17の志野織部皿が登窯第1段階に、図15-10の御深井碗が登窯第2段階に属する。大型の鉢として登窯第2段階の瀬戸鉢(図13-7)も見受けられる。

一方、器面に鉄釉を施した筒形の片口(図15-18~20)も出現するが、いずれも登窯第2段階のものである。また、器形は不明であるが、図16-8のような筒形の器種もある。

ロ. 鉄製品

井戸跡から出土した陶磁器以外の遺物は、3点の鉄製品を除いてはない。図16-9は刀子状のものである。また、図16-10・11は二枚の鉄板からなる三角形の製品であるが、その種類・用途は不明で

ある。

(2) その他の遺構出土の遺物

井戸跡以外の出土遺物は少ない。また細片が多く、各遺構の特質を表したのも極めて少ない。図17-9・10はいずれも南辺土塁を断ち割った第2トレンチから出土している。9の天目茶碗は大窯第2段階に、また10の鉄釉鉢も大窯第2段階に属すると考えられるが、出土状態が今一つ詳らかでなく、土塁の構築時期を特定するには至らない。

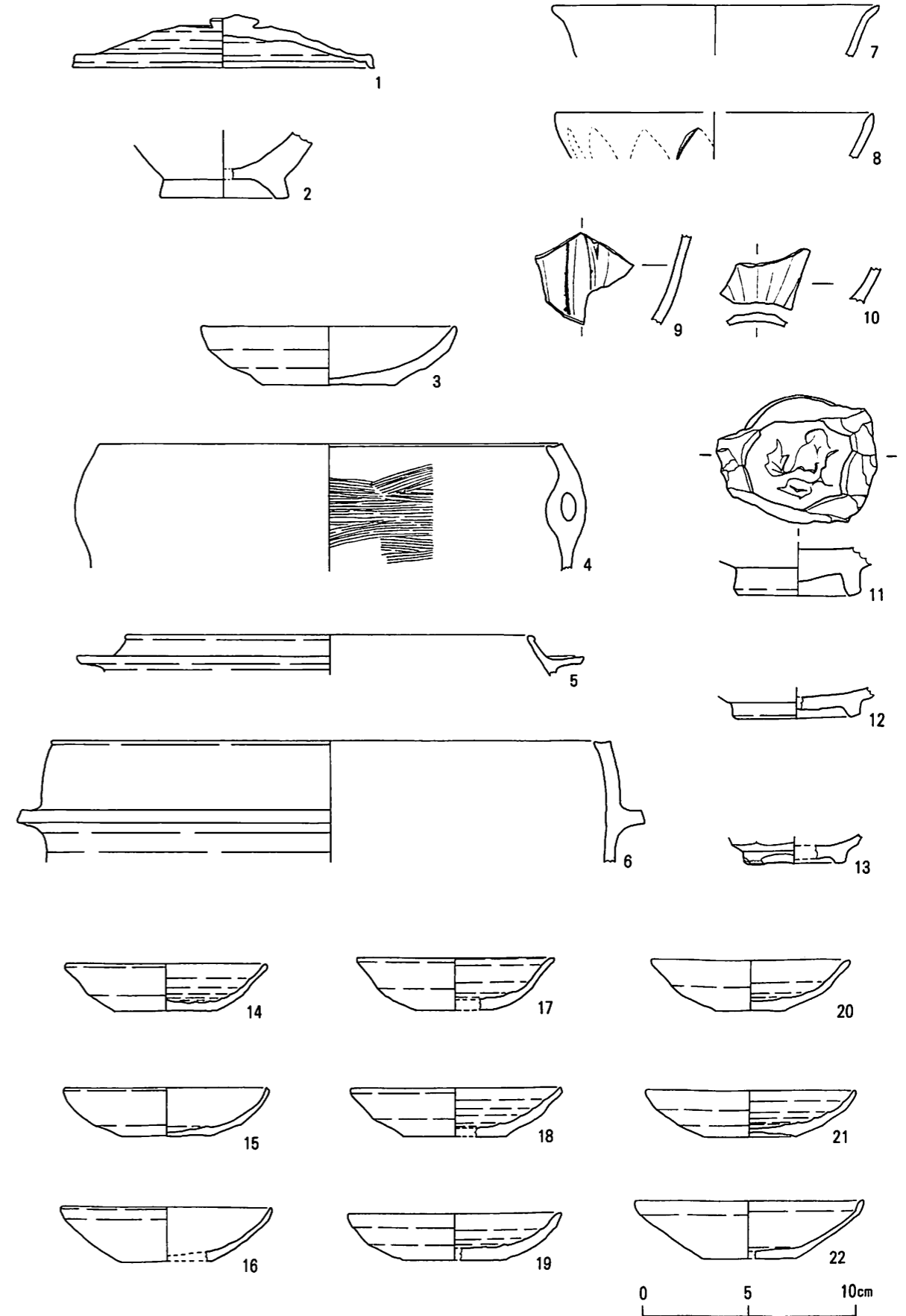


図12 第一次調査区域出土遺物 (1)

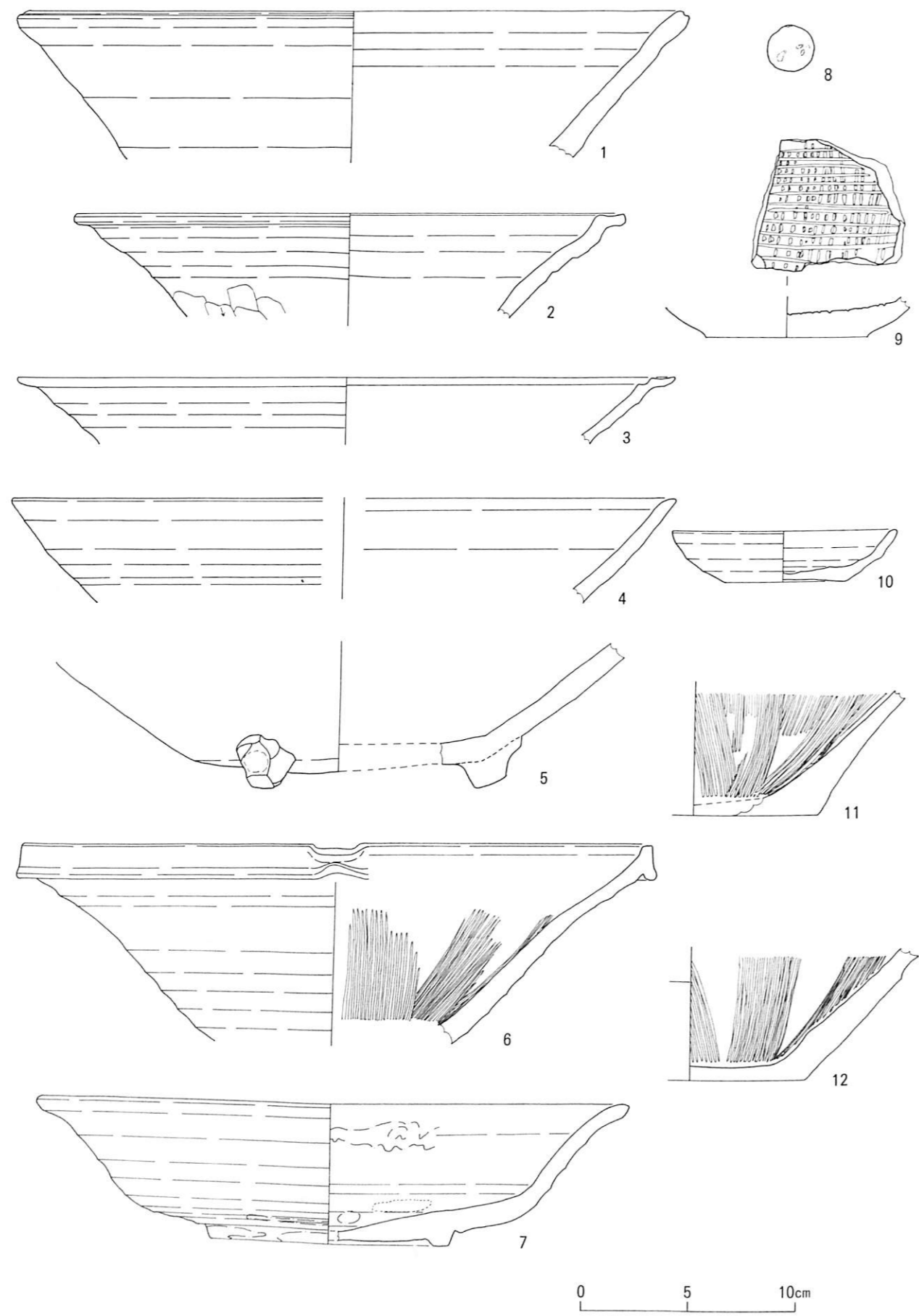


图13 第一次調査区域出土遺物 (2)

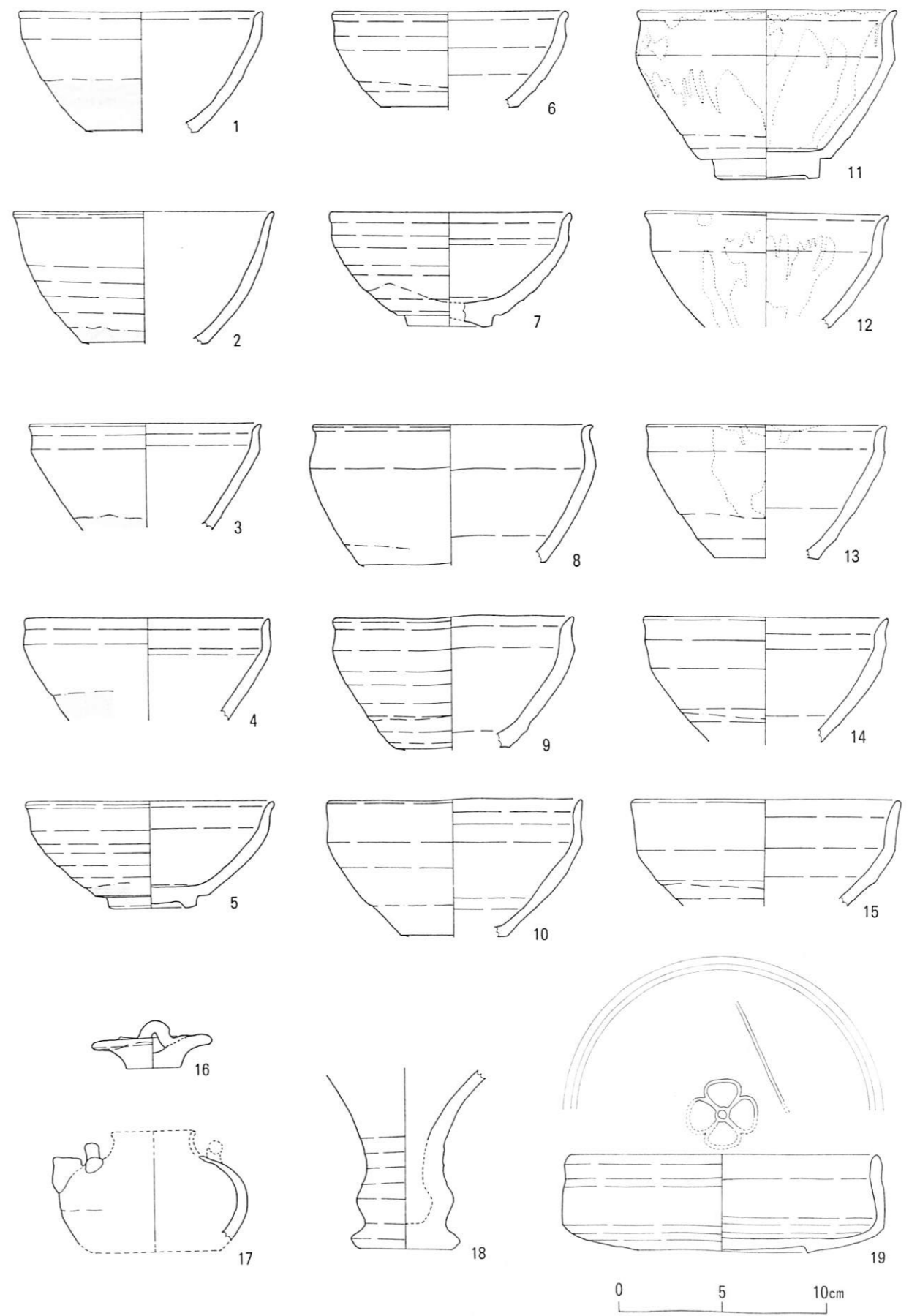


图14 第一次調査区域出土遺物 (3)

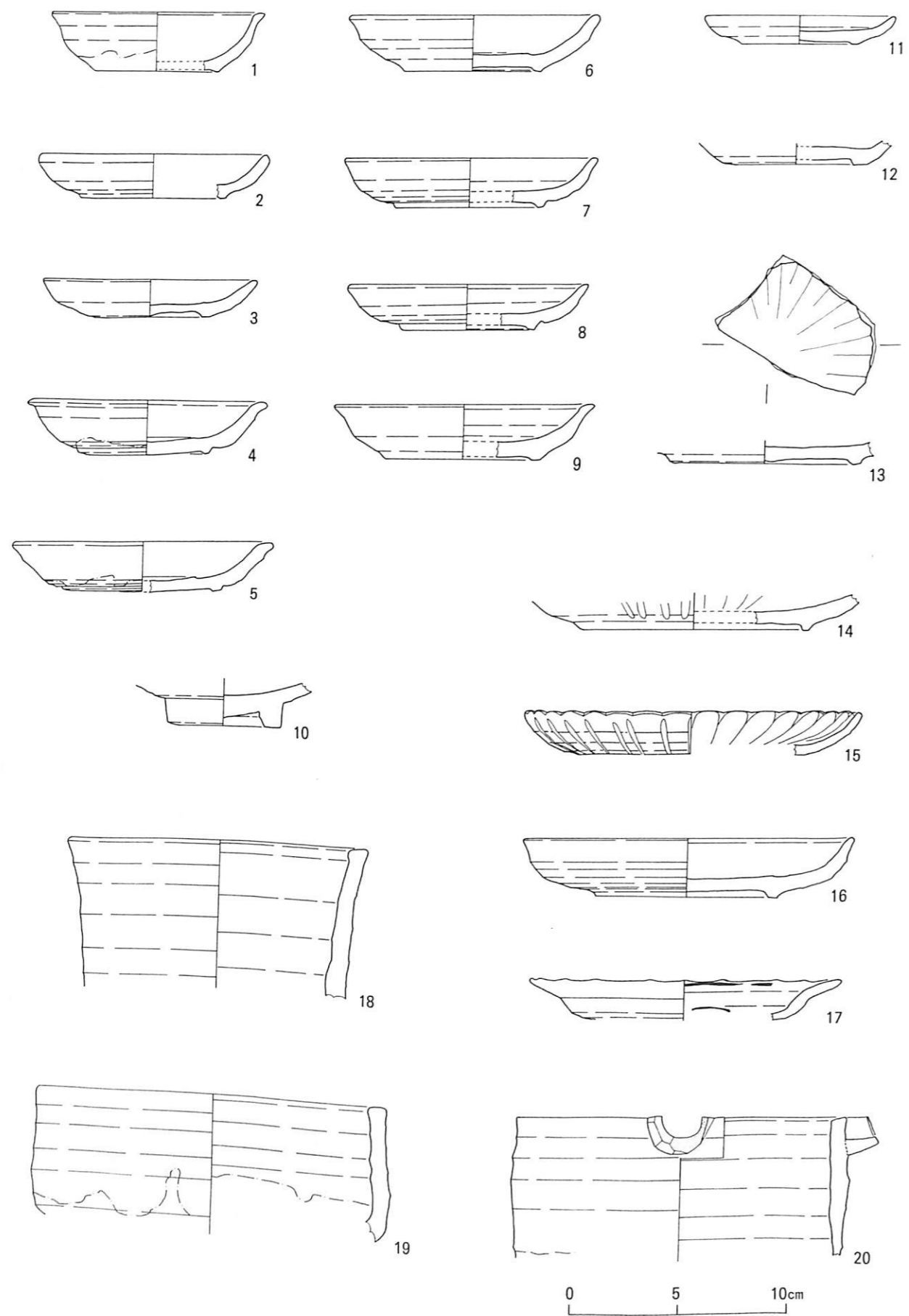


图15 第一次調查区域出土遺物 (4)

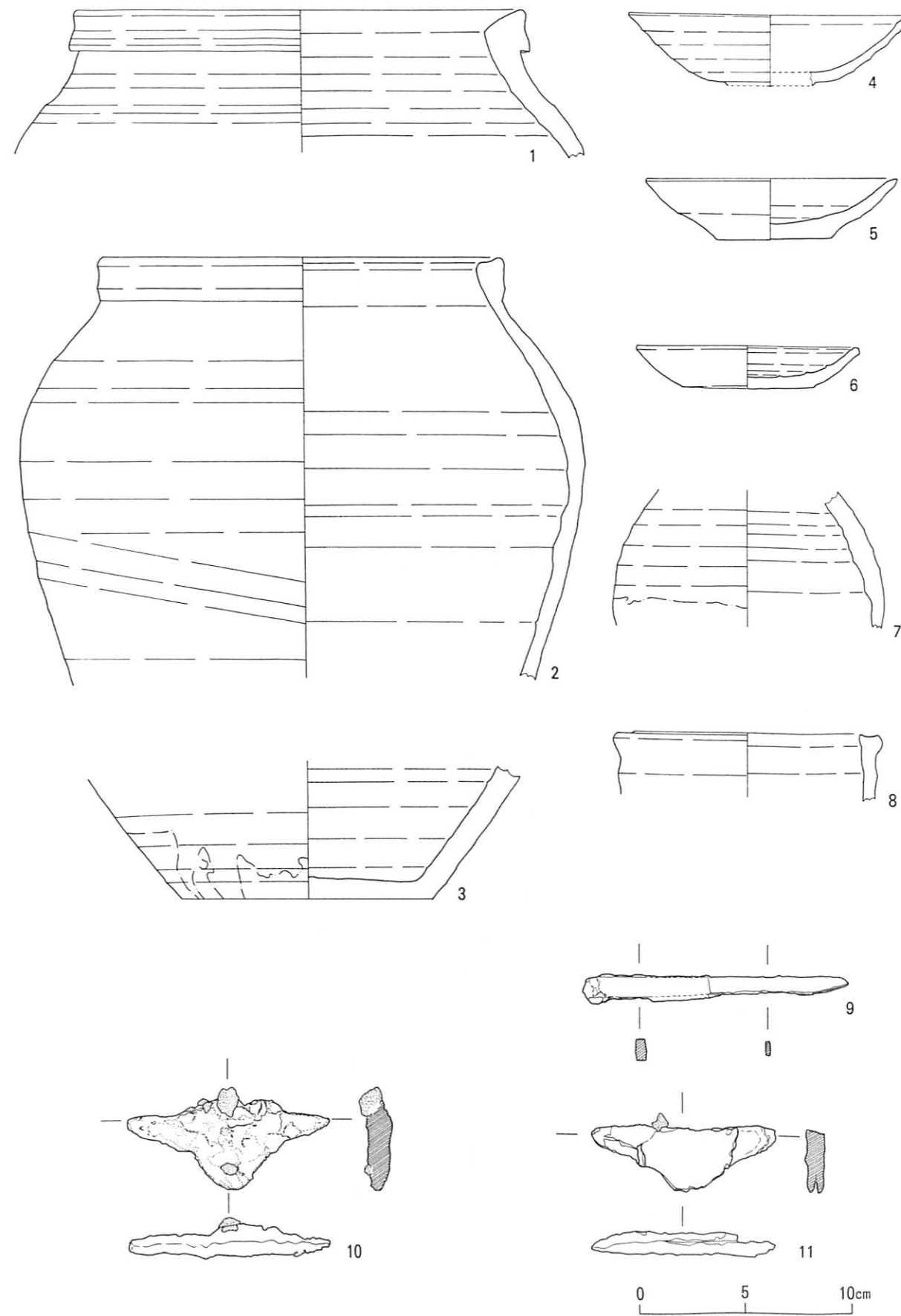


图16 第一次調查区域出土遺物 (5)

第3章 第二次調査

第1節 調査に至る経過

長久手農業協同組合の依頼を受けて岩作城跡の第一次調査を実施している間に、主要地方道瀬戸・大府・東海線の東側で飲食店を営む日比野紀幸氏から、店舗併用住宅新築工事と駐車場設置の計画が提示された。当該計画地は、岩作城跡の北東端に位置することからその取扱いについて協議を重ねた結果、工事区域にトレンチを設定し岩作城跡の遺構の検出と遺物の採集（岩作城跡第二次調査）を行うこととなった。

発掘調査は、昭和61年2月8日から開始され、同15日に終了した。

第2節 調査の方法及び遺構の検出

店舗併用住宅新築予定か所に、東西10m×南北2mのトレンチを、また駐車場設置予定地に東西4m×南北2mのトレンチを設定した。（調査面積28㎡）。二本のトレンチではいずれも基底の黄褐色砂層やその上の五層に分けられる堆積層に明確な遺構面は検出できなかった。

第3節 出土遺物

第二次調査で発見された遺物は少数で、国産陶器に限られる（図19）。また、その年代も第一次調査の遺物のそれを逸脱するものではなかった。古代の陶器はいずれも猿投窯製品で、1は須恵器の坏蓋で7世紀後半のもの、2は灰釉長頸瓶でK-90期に属する。中世陶器では、5～8が美濃系の山茶碗で5・6が15世紀前半代に比定される。また、9は瀬戸灰釉鉢で古瀬戸釉鉢で古瀬戸後期（後）の15世紀中葉のものである。

戦国期の陶器は細片で図示できないが、天目茶碗、鉄釉すり鉢が出土している。また、10は常滑甕で16世紀前半代におくことができよう。この他に、土鍋・内耳鍋が若干出土している（3・4）。

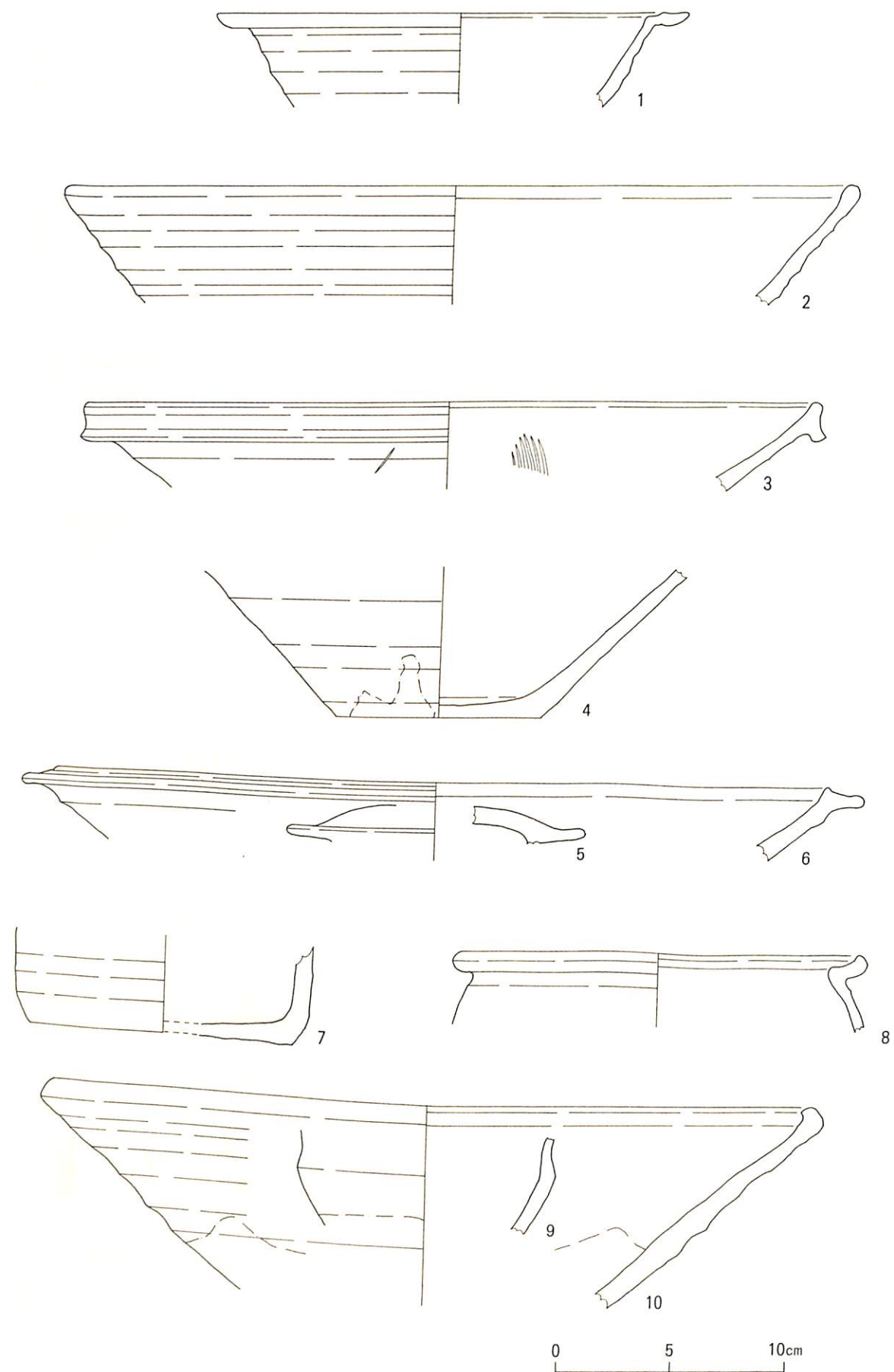


図17 第一次調査区域出土遺物 (6)

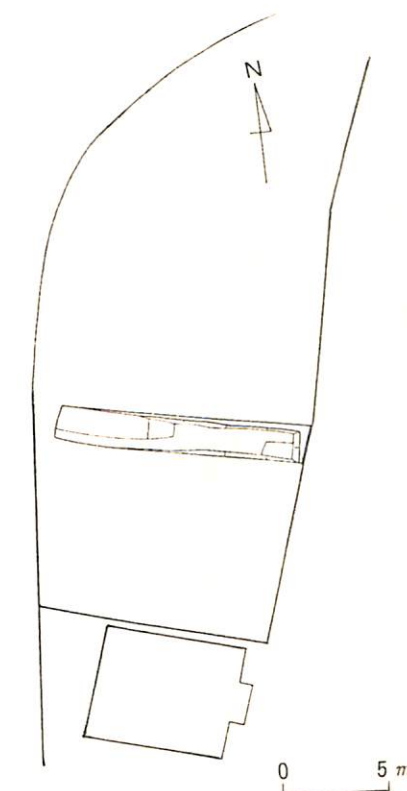


図18 第二次調査区域トレンチ図

第4章 第三次調査

第1節 調査に至る経過

本書第2章第2節の(1)岩作城跡の範囲・形状の推定でも述べた、長久手町役場と県道田畑・名古屋線間の三角形の私有地は岩作城跡の北西コーナーを表したものであるが、昭和61年4月に近藤勝俊氏から歯科医院建設計画が提示され、前二例と同様遺跡の取扱いについて協議を重ねた。その結果、建設予定区域にトレンチを設定し、遺構検出・遺物採集(岩作城跡第三次調査)を行うこととなった。

発掘調査は、昭和61年8月4日から開始され、9月4日に終了した。

第2節 調査の方法及び遺構の検出

歯科医院建設予定地に沿って、南北約24m×東西幅3mのトレンチを軸に、西方に2本、東方1本のサブトレンチを設定した。(調査面積 約136㎡)。調査区域は、明治18年の地籍図によれば北辺と西辺に沿って幅広い田が連なり、その内側に細長い畑地を挟んで再びかなり大きな田があり、さらにその南に広い畑地がある。このような様相は、田を堀や池、広い畑地を居住空間、狭い畑地や草生地を土塁の名残とすると、郭内の居住空間の北側に配された園池と想定することもできる。

しかし、調査の結果は、上記のような居住域、土塁、さらには庭園は検出されず、各トレンチの地山面は、第一次調査の際確認された南辺土塁内側の濠と同様の様相であった。なお、東方のサブトレンチからは、直径3.5mの土坑が検出されたが、近隣住民の話によって第2次世界大戦前の垂炭採掘穴であることが判明した。また、調査区全体が小礫まじりの埋土で被われており、垂炭採掘が下火になった戦後に一気に埋立られたものと考えられる。

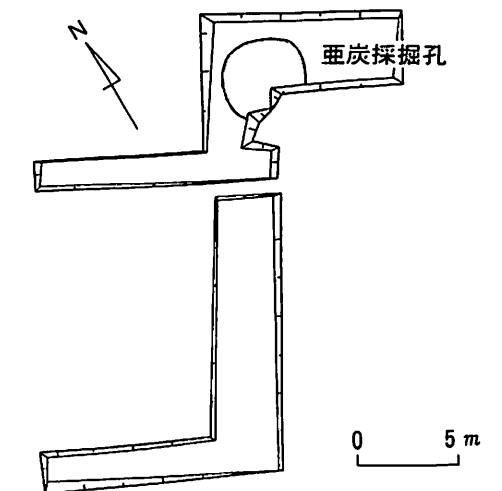


図20 第三次調査区域トレンチ図

第3節 出土遺物

第三次調査で発見された遺物量も決して多くない。その上、戦国期の陶器は皆無に等しく、大半が古代・中世の陶器であった。図21-1・2は猿投窯の瓶と盤の底部であり、O-10期と思われる。3・4はいずれも瀬戸山茶碗で古瀬戸中期(前)の14世紀前葉に比定されよう。また10・11は瀬戸の鉢であるが、前者は古瀬戸前期(後)-13世紀後半-に、後者は古瀬戸中期(後)-14世紀中葉-にさかのぼる。さらに図21-12の灰釉瓶子、13の灰釉花瓶、14のおろし皿、15の灰釉平碗は、いずれも古瀬戸後期(前)-15世紀初頭-に位置づけられる。一方、美濃山茶碗も15世紀代には尾張北部・東部に参入してくるが、図21-5~8もその一群である。

戦国期の陶器としては、図21-9が唯一図化できたが、大窯期のものであるがそれ以上の時期の特定はできなかった。

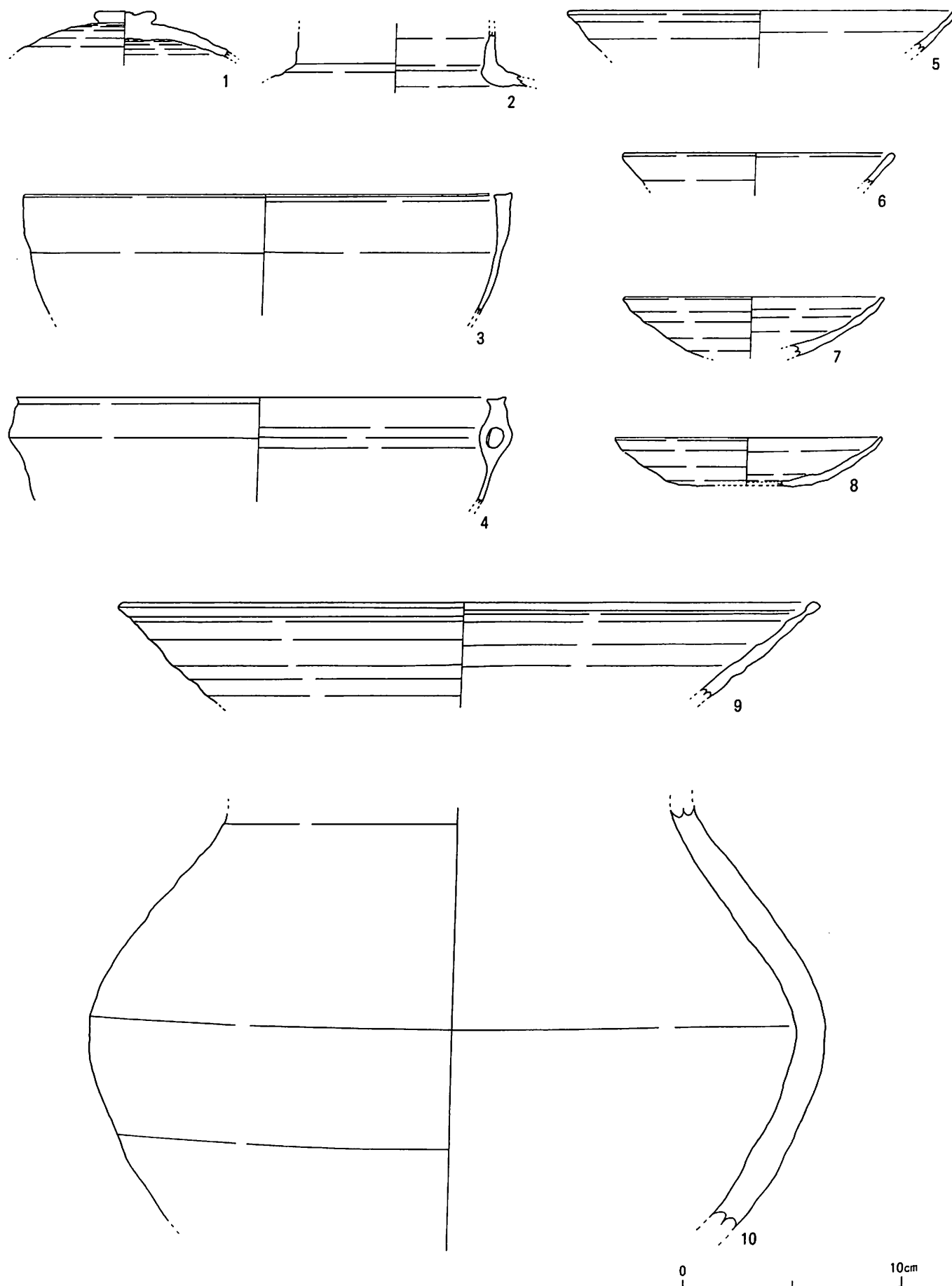


図19 第二次調査区域出土遺物

第5章 小 結

第1節 検出遺構と出土遺物から見た岩作城跡

1985～86年にかけて三次にわたって実施された発掘調査は、当時残存していた城跡南辺の土塁から北側の区域、東域の一部、及び城跡の北西部計890㎡を対象とした。発掘調査の結果、岩作城跡の居住区域は北半に偏っており、南辺の大半は土塁内側の濠、もしくは明治以降の土塁のかさ上げに用いられた土取り跡と想定される低地であった。第一次調査の対象とした北半の居住区域からは作業場跡、砲弾形の井戸跡とそれに係る建物の地貫を支えていた石列が検出された。また、南辺の虎口付近の土塁の調査によって検出された大型の花崗岩列や木杭は明治以降の土留のためのものと判断されたが、虎口そのものの構造は、動線に屈曲を強いていない単純な形態を示している。また、南辺の土塁の外側に顕著な壕や土塁の痕跡は確認されていない。このことから、岩作城跡は一重の土塁と濠に囲まれた方形単郭構造であったと想定される。なお、第二次調査では、明確な遺構は検出されず、また第三次調査を行った北西部でも、遺構の検出状況が必ずしも良好ではなく、居住区域の実態に迫ることが困難であった。

三次にわたる発掘調査で出土した遺物は、奈良時代から江戸時代に至る陶磁器が大半を占めている。これらの出土遺物のなかで特筆されるのは、第一次調査A-8区から検出された井戸跡からの一括遺物である。砲弾型を呈した素掘りの井戸跡から、乱雑に投げ入れられた大小の石とともに、多量の陶磁器が出土している。これらの陶磁器も幅広い年代にわたっているが、14世紀後半代（室町時代前半代）の山茶碗から17世紀（江戸時代前葉）の天目茶碗や織部大鉢に至る瀬戸・美濃窯製品が中核を占めている。特に、それらの下限は登窯第Ⅱ期（17世紀中葉）であることに留意すべきである（図22）。

以上の発掘調査の結果から、岩作城跡の推移は次のように推測されよう。

- (1) 岩作城跡は、14世紀後半代（室町時代前半代）頃、構築された。
- (2) 天正12年（1584）の小牧・長久手の合戦の折に岩作城跡は陥落したと伝えられているが、その後も城館としての形態は維持されていた。
- (3) 江戸時代に入り、大々的に整地が行われ、建物の礎石や陶磁器類が井戸跡に投入された。寛文年間（1661～73）に成立した『寛文村々覚書』で、岩作城跡は「先年今井五郎太夫居城ノ由、今ハ畑ニ成・・・」と記載されている。井戸跡の遺物の下限が17世紀中葉であることを考慮すれば、城館としての機能の停止は寛文年間からあまり逆上らない時期を想定することができる。

第2節 岩作城と今井氏

岩作城の城主については、第1章第3節で列挙した文献によれば、今井五郎太夫、今井四郎兵衛と記述されている。また、『尾張志』では、天正12年（1584）の小牧・長久手の合戦の折に岩崎城で戦死した今井四郎三郎は、岩作城主今井四郎兵衛の子ではないか、と推測している。この今井氏について若干触れておこう。

岩崎城の戦いは、岡崎城を急襲しようとした秀吉の意図を挫いたばかりか、秀吉軍の多くの武将を死に至らしめた徳川・織田軍の勝利をもたらした。このため、岩崎城で戦死し300人余りの籠城者の勲功は永く語

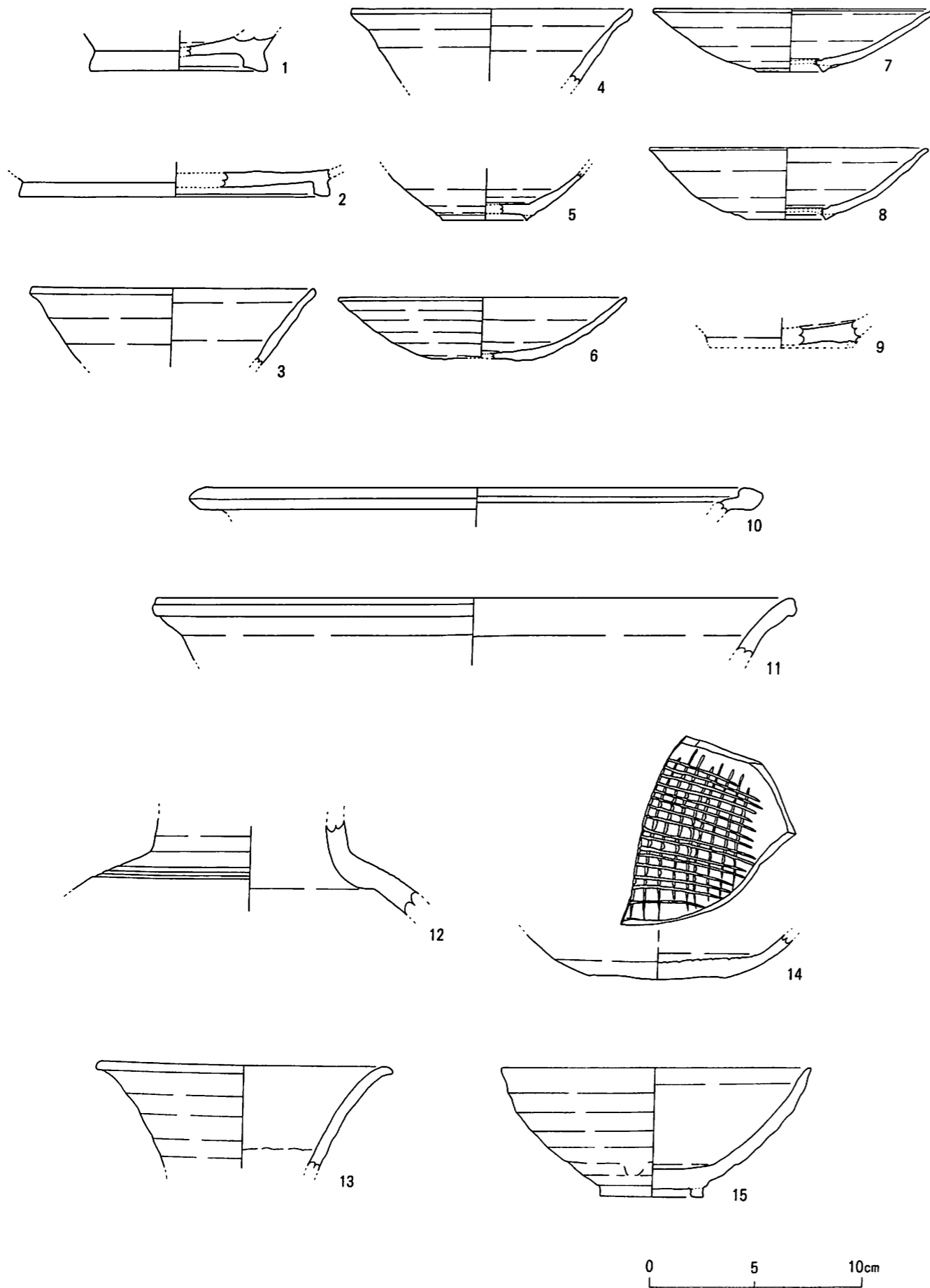


図21 第三次調査区域出土遺物

時期	天目茶碗	皿類	その他	壺	鉢類
AD1485					
1520	大窯 I				
1555	大窯 II				
1590	大窯 III				
1610	大窯 IV				
	登窯 I				
	登窯 II				

0 5 10 15cm

図22 第一次調査区域井戸跡出土遺物の年代観

り種となった。この籠城者のなかに、今井姓の武士が次表のように若干見受けられる。

丹羽正道氏文書	丹羽軍功録	岩崎籠城戦死之記	長久手軍記
今井七右衛門	今井七右衛門勝澄	今井七右衛門	今井七右衛門
今井小右衛門	〃	〃	〃
今井助八郎	〃	今井介八郎	今井助八郎
今井四郎三郎	〃	〃	〃
	家老		
	今井小八郎		

表1 岩崎城で戦死した今井姓の武士

この今井姓の武士については、甲斐武田の有力家臣団のひとつ今井氏に出自を求めることができよう。甲斐の今井氏は、武田晴信（信玄）の6代祖の武田安芸守信満の子左馬助信景が今井（現甲府市内）で今井姓を名乗ったことに始まる。磯貝正義氏によれば、今井氏の系譜は図23のように表される。さらに、『甲斐国志』巻之九十八 人物部第七では信景から6代目の九兵衛正昌義について、次のような記述がある。「〔略〕同九兵衛昌義信州下郷起請文ニ花押アリ軍鑑ニ使番十二人衆ヨリ足軽隊将トナル騎馬□□足軽十人、系図ニ云フ 天正壬午ノ時召出サレ駿州田中ノ城代トナル後甲州ニ蟄ス文禄四年死ス七十四歳法名ハ釣冷、其ノ男七右衛門勝澄ハ丹羽勘介ニ属シ長久手ノ時岩崎ニ籠リ弟次郎三郎等十七人共ニ戦死スト云云〔以下略〕」。

「天正壬午ノ時」とは、勝頼が織田・徳川軍に追い詰められ自殺し武田氏が滅亡した天正10年（1582）である。武田信玄を尊敬しその軍団を畏怖していた徳川家康は、天正3年（1575）の長篠の合戦以降主家の衰

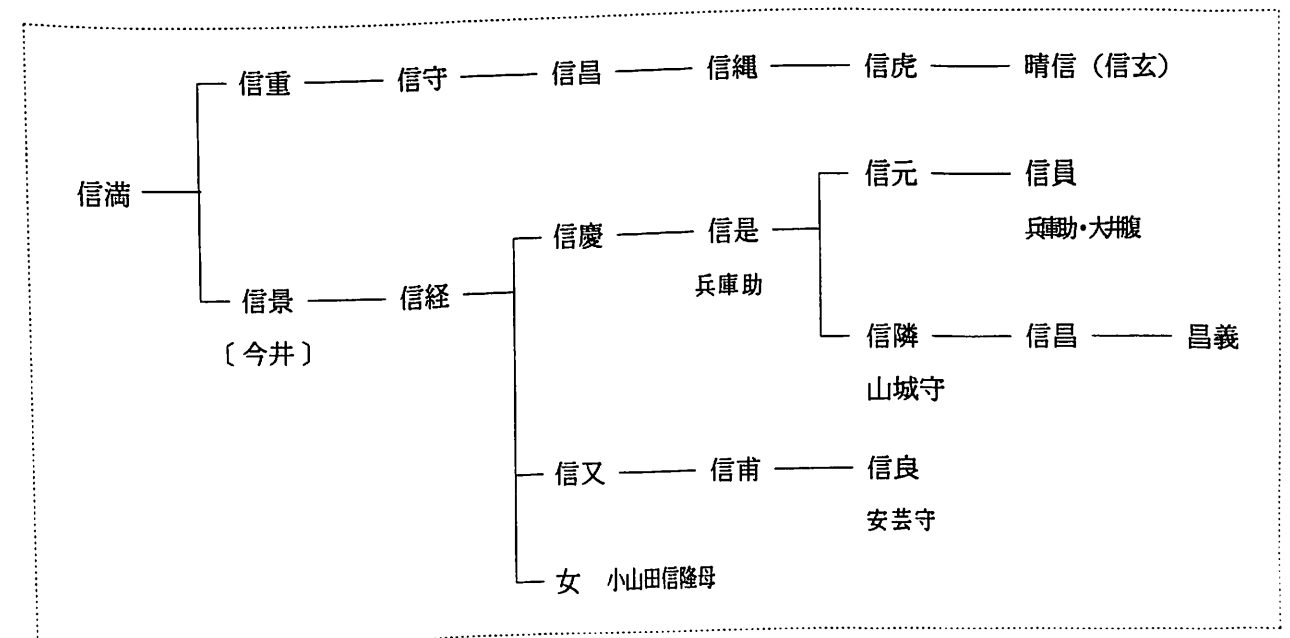


図23 甲斐今井氏略系図

退によって分散しつつあった武田家臣団を織田信長の許可を得ていち早く召し抱えた。今井九兵衛昌義が駿河田中城に招致されたのも、家康の意図があつたのこともかもしれない。一方、岩崎城は、天白川流域での在地開発領主として力を蓄え本郷城（現日進市本郷）を本拠としていた丹羽氏清が天文7年（1538）に築いて以来、尾張の織田と三河の松平との均衡を計りながら、氏識・氏勝・氏次が守ってきた。この丹羽氏においても氏勝・氏次が再三武田への内通を織田信長・信雄に疑われ、浜松の家康の庇護を求めたとのことである。このような武田を巡る家康と丹羽氏の関わりから、丹羽氏に今井一族等の旧武田の家臣が寄留することになったことも、あり得ないことではない。

この岩崎城に寄留していた今井四郎三郎と岩作城主とされる今井四郎兵衛を直接的に結び付けるものはない。しかし、北部の視界を東西に延びる丘陵によって遮られている岩崎城にとって岩作城は、少なくとも香流川流域の低地の状況を把握するに最も相応しい場所にある。高力種信の描いた『長久手安見の図』（図2）は、そのような位置関係を見事に示している。恐らく、河川流域の支配に長けていた丹羽氏は、尾張北部の情勢を把握し、また香流川流域をも支配下に取り込むための橋頭堡として岩作城を活用したのではなかろうか。その岩作城に丹羽氏は今井氏を派遣したのではないかと考えたい。第1節で述べたように、岩作城跡は14世紀後半代（室町時代前半代）頃、構築されたと推論したが、同城跡の居住者はこの地域の情勢に応じて、幾度となく交替していたことが想定される。天正年間の後半には、丹羽氏が送りこんだ今井氏が城主の立場にあったであろう。さらに推論すれば岩作城跡が、長久手古戦場の中にあつてその存在を示す戦記等がないのは、丹羽氏がいち早く岩作城の軍勢が岩崎城に撤退させ、故意に出城的機能を放棄していたからではないだろうか。

遺物観察表 (1)

(#) ; 井戸跡出土 (包) ; 遺物包含層出土

実測図番号 図版番号	種別・器種	寸法 (cm)				残存度	特徴	出土地点
		器高	口径	胴径	底径			
図12-1 (写真 8-1)	須恵器 坏蓋	2.6	14.2			1/2	O-10期	一次; A-8 (#)
" - 2	灰釉 瓶(?)				6.0	1/8	"	" "
" - 3 (写真 8-2)	土師 皿	2.9	12.1		6.3	1/2	底部; 回転糸切痕 内面; 煤付着	" "
" - 4 (写真 8-3)	" 内耳鍋		22.1	24.4		1/4	内面; 木篋調整痕 外面; 煤が厚く付着	" "
" - 5	" 羽釜		19.2			1/8	内・外面; 横ナデ調整 外面下部; 煤付着	" ; G-1
" - 6 (写真 8-4)	" "		26.7			1/6	内・外面; 横ナデ調整 外面下部; 煤付着	" ; A-8 (#)
" - 7 (写真 8-6)	青磁 碗		9.9			小片	淡青緑色を呈す	" "
" - 8 (写真 8-7)	青磁 蓮弁文碗		14.6			"	深青緑色を呈す	" ; A-8 (包)
" - 9 (写真 8-8)	" "					"	"	" ; A-8 (#)
" - 10 (写真 8-5)	" "					"	青緑色を呈す	" ; A-8 (包)
" - 11 (写真 8-9)	" 陰刻花文碗				5.0	底部残存	淡青緑色を呈す	" ; A-8 (#)
" - 12	" 碗				5.2	底部1/2	深青緑色を呈す	" "
" - 13	白磁 皿				3.7	底部1/3	青味がかつた白色釉 八角に面取り	" ; A-8 (包)
" - 14 (写真 8-10)	無釉 皿	2.2	9.5		4.9	1/8	茶褐色を呈す 内面; 重圈文 (6条)	" "
" - 15	" "	2.3	9.7		4.0	1/2	黄褐色	" ; A-7 (包)

遺物観察表 (2)

実測図番号 図版番号	種別・器種	寸法 (cm)				残存度	特 徴	出土地点
		器高	口径	胴径	底径			
図12-16	無釉 皿	2.5	10.0		4.3	1/4	黄褐色	一次; A-7 包
" -17 (写真 8-14)	" "	2.4	9.5		3.8	1/2	黄灰色 内面; 重圈文 (3条)	" ; A-8 (#)
" -18 (写真 8-15)	" "	2.3	10.2		5.0	1/4	茶褐色 内面; 重圈文 (5条)	" "
" -19 (写真 8-11)	" "	2.2	10.2		5.0	1/2	赤褐色 内面; 重圈文 (4条)	" "
" -20 (写真 8-12)	" "	2.3	9.3		3.2	1/2	黄灰色 内面; 重圈文 (3条)	" "
" -21 (写真 8-13)	" "	2.2	9.8		4.3	1/2	茶褐色 内面; 重圈文 (5条)	" "
" -22	" "	2.8	10.7		4.3	1/3	灰褐色	" ; A-9 包
図13-1 (写真 8-18)	片口鉢		30.2			1/6	横ナデ調整 口縁に沈線	" ; A-8 (#)
" -2 (写真 8-19)	"		26.4			1/5	灰黒色	" "
" -3 (写真 8-20)	灰釉 折縁深皿		31.6			1/8		" "
" -4 (写真 8-21)	灰釉 鉢		31.6			1/8	淡黄緑色	" "
" -5 (写真 8-22)	灰釉 三足盤				13.8	1/4	内面; 磨耗痕	" "
" -6 (写真 8-23)	鉄釉 すり鉢		30.0			1/2	内面; 16本1単位の櫛目・磨耗痕	" "
" -7 (写真 8-26)	黄瀬戸 鉢	7.2	27.6		10.0	1/4	内面上辺・見込み; 縁釉 見込み; メアト	" "
" -8 (写真 8-16)	陶 丸			2.2		完	部分的に自然釉	" "

遺物観察表 (3)

実測図番号 図版番号	種別・器種	寸法 (cm)				残存度	特 徴	出土地点
		器高	口径	胴径	底径			
図13-9 (写真 8-17)	おろし 皿				7.5	1/4	底面; 回転糸切	一次; A-8 包
" -10	無釉 皿	2.4	10.4		5.6	1/2	茶褐色 内面; 重圈文 (4条)	" ; A-8 (#)
" -11 (写真 8-24)	鉄釉 すり鉢				11.5	1/4	内面; 9本1単位の櫛目	" "
" -12 (写真 8-25)	" "				10.6	1/2	内面; 18本1単位の櫛目	" "
図14-1 (写真 9-1)	天目茶碗		11.5			1/4	鉄釉 (黒褐色) 下胴部; 鬼板塗布 (赤褐色)	" ; A-8 (#)
" -2 (写真 9-2)	"		12.4			1/2	鉄釉 (黄緑色) 下胴部; 鬼板塗布 (黒褐色)	" "
" -3 (写真 9-3)	"		11.2			1/8	鉄釉 (黒褐色) 下胴部; 鬼板塗布 (淡紫色)	" "
" -4 (写真 9-4)	"		11.9			1/4	鉄釉 (黒褐色) 下胴部; 鬼板塗布 (赤褐色)	" "
" -5 (写真 9-5)	"	5.2	11.9		3.2	1/8	鉄釉 (黒褐色) 下胴部; 鬼板塗布 (赤褐色)	" "
" -6 (写真 9-6)	"		11.2			1/4	鉄釉 (茶褐色) 下胴部; 無釉	" "
" -7 (写真 9-7)	"	5.6	11.7		3.0	1/4	鉄釉 (黒・茶褐色) 下胴部; 無釉	" "
" -8 (写真 9-8)	"		13.6			1/8	鉄釉 (黒褐色) 下胴部; 無釉	" "
" -9 (写真 9-9)	"		11.6			1/2	鉄釉 (茶褐色) 下胴部; 無釉	" "
" -10 (写真 9-10)	"		12.4			1/2	鉄釉 (暗茶褐色) 下胴部; 無釉	" "
" -11 (写真 9-11)	"	8.3	11.9		4.0	2/3	鉄釉 (茶褐色・黒褐色) 下胴部; 無釉	" "

遺物観察表 (4)

実測図番号 図版番号	種別・器種	寸法 (cm)				残存度	特徴	出土地点
		器高	口径	胴径	底径			
図14-12 (写真 9-12)	天目茶碗		11.3			1/2	鉄釉 (暗緑色・茶褐色) 下胴部; 無釉	一次; A-8 (#)
" -13 (写真 9-13)	"		11.1			1/4	鉄釉 (茶白色・茶褐色) 下胴部; 無釉	" ; A-8 (包)
" -14 (写真 9-14)	"		11.4			1/4	鉄釉 (黒褐色) 下胴部; 無釉	" ; A-8 (#)
" -15 (写真 9-15)	"		12.4			1/8	鉄釉 (茶褐色) 下胴部; 無釉	" "
" -16 (写真 9-16)	鉄釉 蓋 (水滴?)	2.3		5.9	2.5	完	茶褐色 底面; 回転糸切	"
" -17 (写真 9-17)	鉄釉 水滴			9.1		1/4	茶褐色	" ; A-8 (#)
" -18 (写真 9-18)	鉄釉 仏花瓶			4.9		口縁・底部 欠損	黒褐色 ロクロ水挽き	" "
" -19 (写真 9-19)	黄瀬戸 向付	4.8	14.6	15.4	8.0	1/4	見込み; 陰刻花文 見込み・高台内; メアト	" "
図15-1 (写真10-1)	灰釉 小皿	2.9	10.0		5.8	1/4	深緑色	"
" -2 (写真10-2)	鉄釉 皿	2.1	10.8		6.3	1/6	茶褐色	" ; A-8 (#)
" -3 (写真10-3)	志野 皿	1.8	10.2		5.1	1/2	見込み; 内ハゲ 高台内側; 輪トチ痕	" "
" -4 (写真10-4)	" "	2.8	10.9		5.7	完	見込み; 内ハゲ	" "
" -5 (写真10-6)	灰釉 皿	2.6	12.1		6.7	1/2	見込み; 内ハゲ 高台内側; メアト	" "
" -6 (写真10-13)	" "	2.7	11.4		5.8	1/2	見込み; 内ハゲ	" "
" -7 (写真10-14)	志野 皿	2.4	11.6		6.4	1/2	見込み; メアト	" "

遺物観察表 (5)

実測図番号 図版番号	種別・器種	寸法 (cm)				残存度	特徴	出土地点
		器高	口径	胴径	底径			
図15-8 (写真10-8)	志野 皿	2.2	11.0		5.8	1/4	見込み・高台内側; メアト	一次; A-8 (#)
" -9 (写真10-9)	" "	2.6	11.9		6.4	1/4	高台内側; メアト	" "
" -10 (写真10-7)	御深井 碗				4.0	底部残存	黄白色	" "
" -11 (写真10-11)	志野 小皿	1.4	8.4		4.8	1/4		" "
" -12 (写真10-12)	鉄釉 小皿				5.2	1/4	暗紫色・黄褐色	" "
" -13 (写真10-5)	志野 菊皿				8.0	底部1/4	高台内側; メアト	" "
" -14 (写真10-10)	" "				10.2	底部1/4	高台内側; メアト	" "
" -15 (写真10-15)	" "	15.3				1/4		" "
" -16 (写真10-16)	志野 皿	2.9	14.9		7.4	1/2	見込み・高台内側; メアト	" "
" -17 (写真10-17)	志野織部皿		14.2			1/8	鉄絵	" "
" -18 (写真10-18)	鉄釉 片口		14.0			1/4	茶褐色 外面下胴部; 非施釉	" "
" -19 (写真10-19)	" "		16.8			1/4	茶白色・暗褐色 外面下胴部; 非施釉	" "
" -20 (写真10-20)	" "		15.2			1/2	黒褐色 外面下胴部; 非施釉	" "
図16-1 (写真11-1)	鉄釉 甕		21.1			1/8	内外面; 鬼板塗布 口縁内側; 磨耗	" ; A-8 (#)
" -2 (写真11-2)	" "		18.9	27.9		1/4	内外面; 鬼板塗布	" "

遺物観察表 (6)

実測図番号 図版番号	種別・器種	寸法 (cm)				残存度	特 徴	出土地点
		器高	口径	胴径	底径			
図16-3 (写真11-3)	鉄釉 甕				12.0	1/4	茶褐色	一次; A-8 (#)
" - 4	山茶碗		12.8		3.8	1/4	美濃窯製品	"
図16-5 (写真11-4)	土師 皿	2.9	11.3		5.2	完	底部; 回転糸切 内面; 煤付着	" ; A-8 (#)
" - 6 (写真11-5)	無釉 皿	2.1	10.0		5.9	1/4	赤褐色 内面; 重圈文 (4条)	" "
" - 7 (写真11-6)	鉄釉 瓶			12.5		1/3	内外面; 施釉	" ; A-8 (包)
" - 8	鉄釉 片口		12.0			1/8	茶褐色	" ; A-8 (#)
" - 9 (写真11-7)	刀 子 (?)	長さ; 12.5 幅1.0-0.7 暑さ; 0.5-0.2						" "
" - 10 (写真11-8)	鉄製品	長さ; 9.6 幅5.0 暑さ; 1.0					用途不明	" "
" - 11 (写真11-9)	"	長さ; 8.7 幅3.0 暑さ; 0.9					用途不明 2枚の鉄板を重ねている。	" "
図17-1	灰釉 鉢		20.8			1/8	淡黄緑色	" ; A-7 (包)
" - 2 (写真11-10)	鉄釉 鉢		34.4			1/8	外面; 薄く鬼板塗布	" "
" - 3 (写真11-11)	" すり鉢		32.2			小片		" ; C-7
" - 4 (写真11-13)	" 甕			9.0		底部1/2		" ; E-8
" - 5	" 蓋		13.2			1/8	外面; 施釉 (淡茶褐色)	" ; G-8
" - 6 (写真11-12)	" 鉢		17.1			小片		" "

遺物観察表 (7)

実測図番号 図版番号	種別・器種	寸法 (cm)				残存度	特 徴	出土地点
		器高	口径	胴径	底径			
図17-7	鉄釉 片口 (?)				11.9	1/4		一次; F-10/11
" - 8	灰釉 (?) 鉢		17.4			1/4	口縁内側; 灰釉払拭	" "
" - 9	天目茶碗					1/4	鉄釉 (黒褐色)	" ; H- 1
" - 10 (写真11-14)	鉄釉 鉢		33.4			1/8	内外面; 上辺施釉 (茶褐色)	" "
図19-1	須恵器 蓋					小片	猿投窯製品	二次 砂礫上面
" - 2	灰釉 長頸瓶					小片	猿投窯製品	" "
" - 3	土師 鍋		23.2			1/6	外面; 煤付着	" "
" - 4	土師 内耳鍋		22.8			小片	外面; 煤付着	" "
" - 5	山茶碗		17.8			小片	美濃窯製品	" "
" - 6	"		12.4			小片	美濃窯製品 黄白色	" "
" - 7	"		11.8			1/4	美濃窯製品	" "
" - 8	"	2.4	12.2			小片	美濃窯製品・黄白色 底面; 糸切痕	" "
" - 9	灰釉 鉢		17.8			小片		" "
" - 10	常滑 甕			27.8		胴部1/6	茶褐色 うのふ状自然釉	" "

遺物観察表 (8)

実測図番号 図版番号	種別・器種	寸法 (cm)				残存度	特 徴	出土地点
		器高	口径	胴径	底径			
図21-1	灰釉 瓶				8.4	底部1/3	猿投窯製品	三次; C-2 黒色土層
- 2	須恵器 盤				14.8	底部1/4	猿投窯製品 内面; 磨耗痕	" "
- 3	山茶碗		13.6			小片	瀬戸窯製品	" "
- 4	"		13.6			小片	瀬戸窯製品 内面; 磨耗痕	" ; C-3 黄褐色土層
- 5	"				4.2	小片	美濃窯製品 底面; 回転糸切痕	" " 黒色土層
- 6	"	3.1	14.0		3.6	1/8	美濃窯製品 底面; 回転糸切痕	" " "
- 7	"	3.2	13.2		3.0	小片	美濃窯製品 内面; 磨耗痕	" ; C-2 黒色土層
- 8	"	3.6	13.2		3.8	1/3	美濃窯製品 内面; 磨耗痕	" " "
- 9	灰釉 小皿					小片		" ; C-4 黒色土層
-10	片口鉢		30.8			小片		" ; A-6 黒色土層
-11	灰釉 鉢		26.0			小片		" ; C-3 黄褐色土層
-12	灰釉 瓶子					小片	肩部; 3条沈線	" ; C-3 黒色土層
-13	灰釉 花瓶		14.0			小片	黄褐色	" ; C-3 黄褐色土層
-14	おろし 皿				6.5	底部1/2	底面; 糸切痕	" ; C-2 黒色土層
- 15	灰釉 平碗	6.5	14.6		5.0	1/4		" ; C-3 黒色土層

参 考 文 献 一 覧

- 柴田 義雄 『長久手の戦』 長久手教育委員会 1984
『瀬戸市史 陶磁史篇 二』 瀬戸市史編纂委員会 1981
宇野 隆夫 「井戸考」『史林』第65巻第5号 1982
『長久手町史 資料編三 文化財』長久手町史編さん委員会 1986
『岩崎城跡発掘調査報告書』日進市教育委員会 1987
『大草城跡地形測量等調査報告書』長久手町史編さん委員会 1987
『愛知県埋蔵文化財情報 2』(昭和60年度版) 愛知県教育委員会
・(財)愛知県埋蔵文化財センター 1987
藤澤 良祐 「本業焼の研究(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 VIII』
瀬戸市歴史民俗資料館 1989
『特別展・長久手の中世 — その城館跡を中心に —』長久手教育委員会 1989
『尾呂 — 愛知県瀬戸市 定光寺カントリークラブ増設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —』瀬戸市教育委員会 1990
『愛知県中世城館跡調査報告 I』(尾張地区)愛知県教育委員会 1991
藤澤 良祐 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』(株)新人物往来社 1991
『愛知県遺跡地図(1)』(尾張地区)愛知県教育委員会 1994
永原 慶二 編 『常滑焼と中世社会』小学館 1995

報告書抄録

フリガナ	ヤザゴジョウセキハックツチョウサガイヨウホウコクショ								
書名	岩作城跡発掘調査概要報告書								
副書名									
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	赤羽 一郎								
編集機関	長久手町教育委員会								
所在地	〒480-11 愛知県愛知郡長久手町大字岩作字城の内60番地の1 TEL 0561-63-1111								
発行年月日	西暦1997年2月1日								
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地		コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
	ヤザゴジョウセキ 岩作城跡	アイチグンナガクテチョウ 愛知郡長久手町大字岩作 シロノウチ 字城ノ内	ヤザコ 23304	15027	35度 11分 00秒	137度 03分 27秒	19850826 ~0930 19860208 ~0215 19860804 ~0830	800 28 136	店舗建設 倉庫建設 病院建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
岩作城跡	城館跡	室町・戦国・江戸	井戸跡・作業場跡 土塁・虎口跡	須恵器、瀬戸・美濃・常滑窯製品 鉄製品					

写真図版



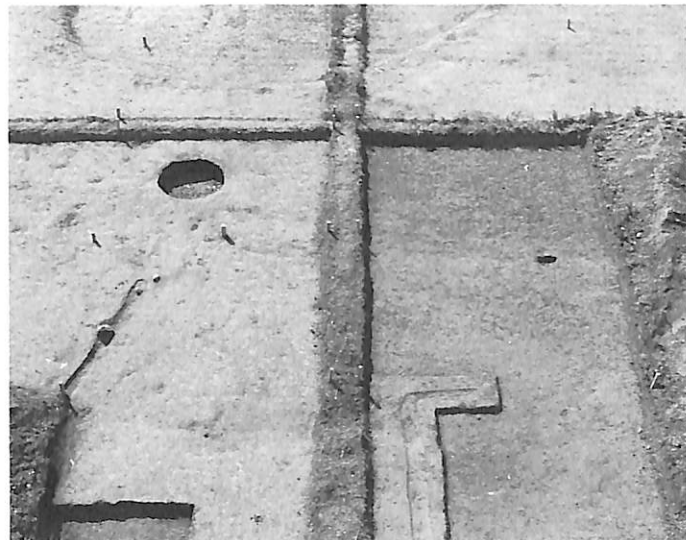
1 調査区域遠景 (南から)



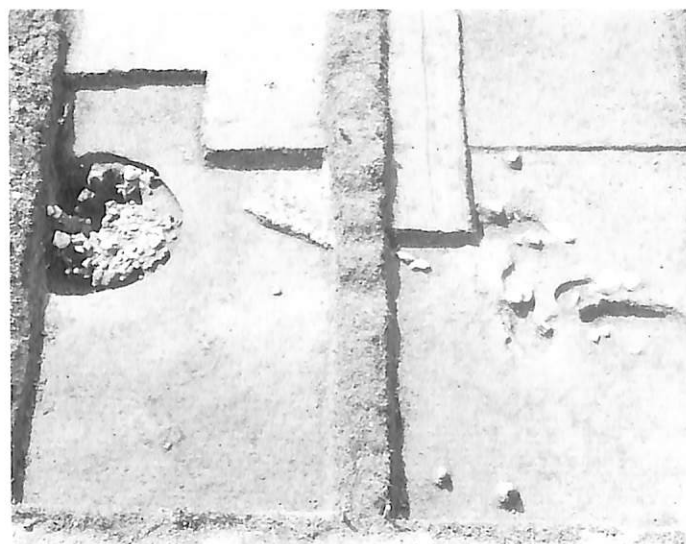
2 調査区域近景 (南から)



1 調査区域南部（虎口・土塁など）



2 調査区域中央部



3 調査区域北部（井戸跡・作業場跡）



1 井戸跡 (検出面)



2 井戸跡 (掘削状況)



3 井戸跡 (底部検出状況)



1 調査前の現場



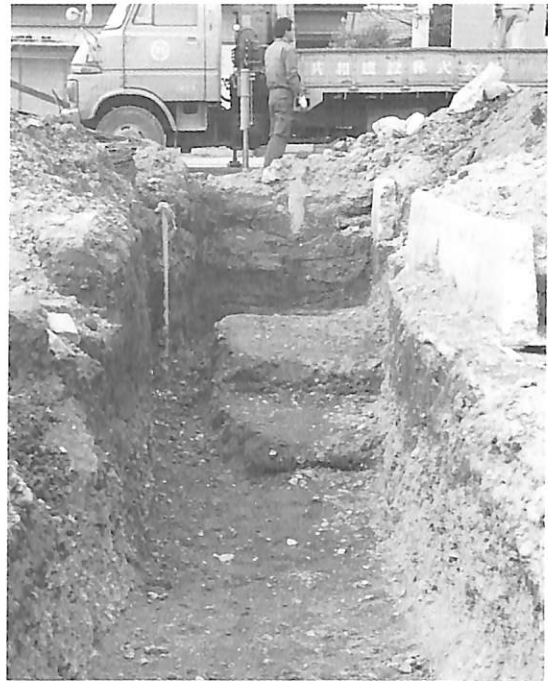
2 調査風景



3 調査報告会



1 調査区掘削状況



2 調査区（東から）



3 調査区（西から）



1 調査区遠景（調査前）



2 亜炭採掘孔跡



3 調査区遠景（調査後）

写真8：第一次調査出土遺物 (1)

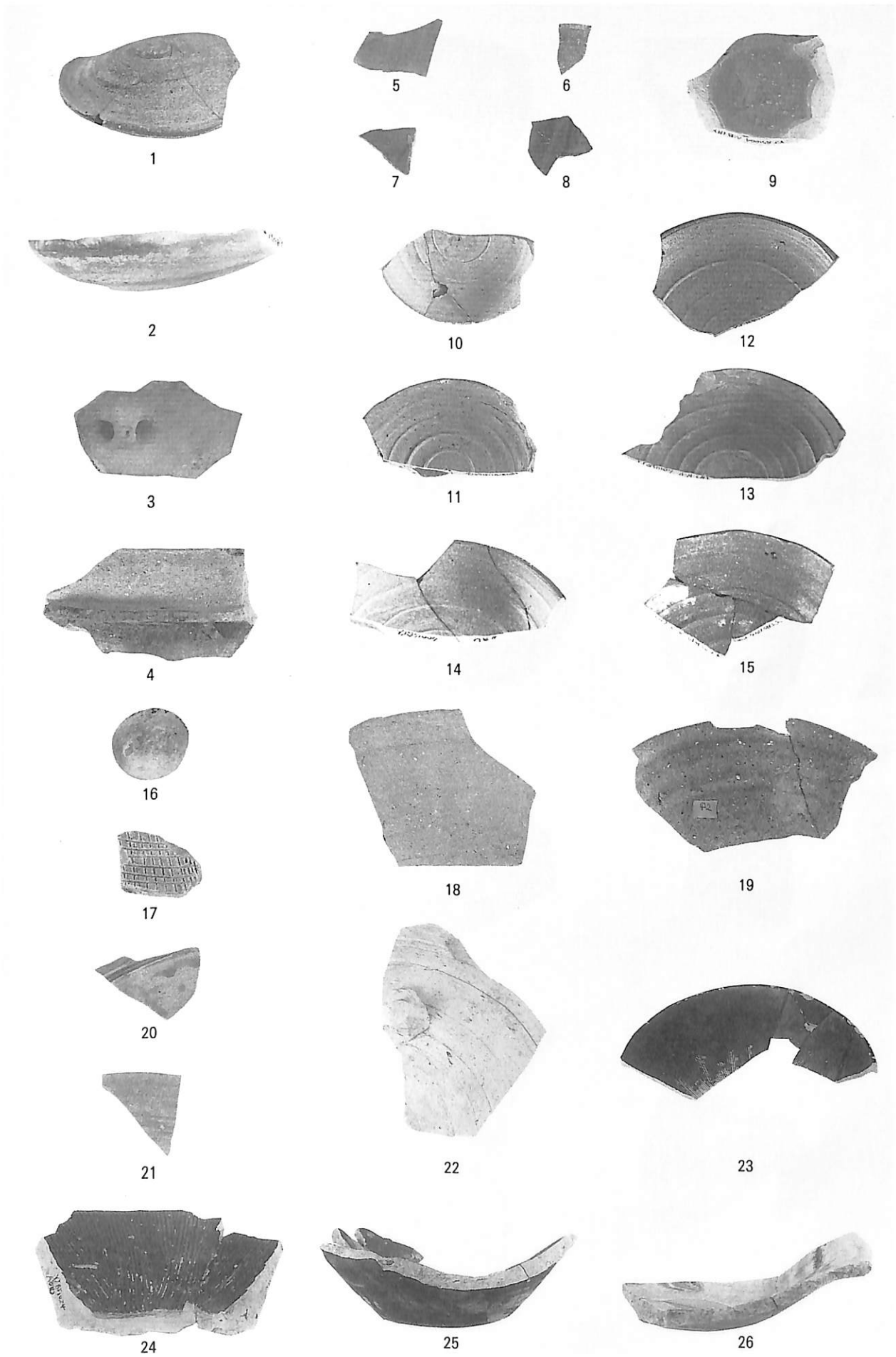


写真 9 : 第一次調査出土遺物 (2)

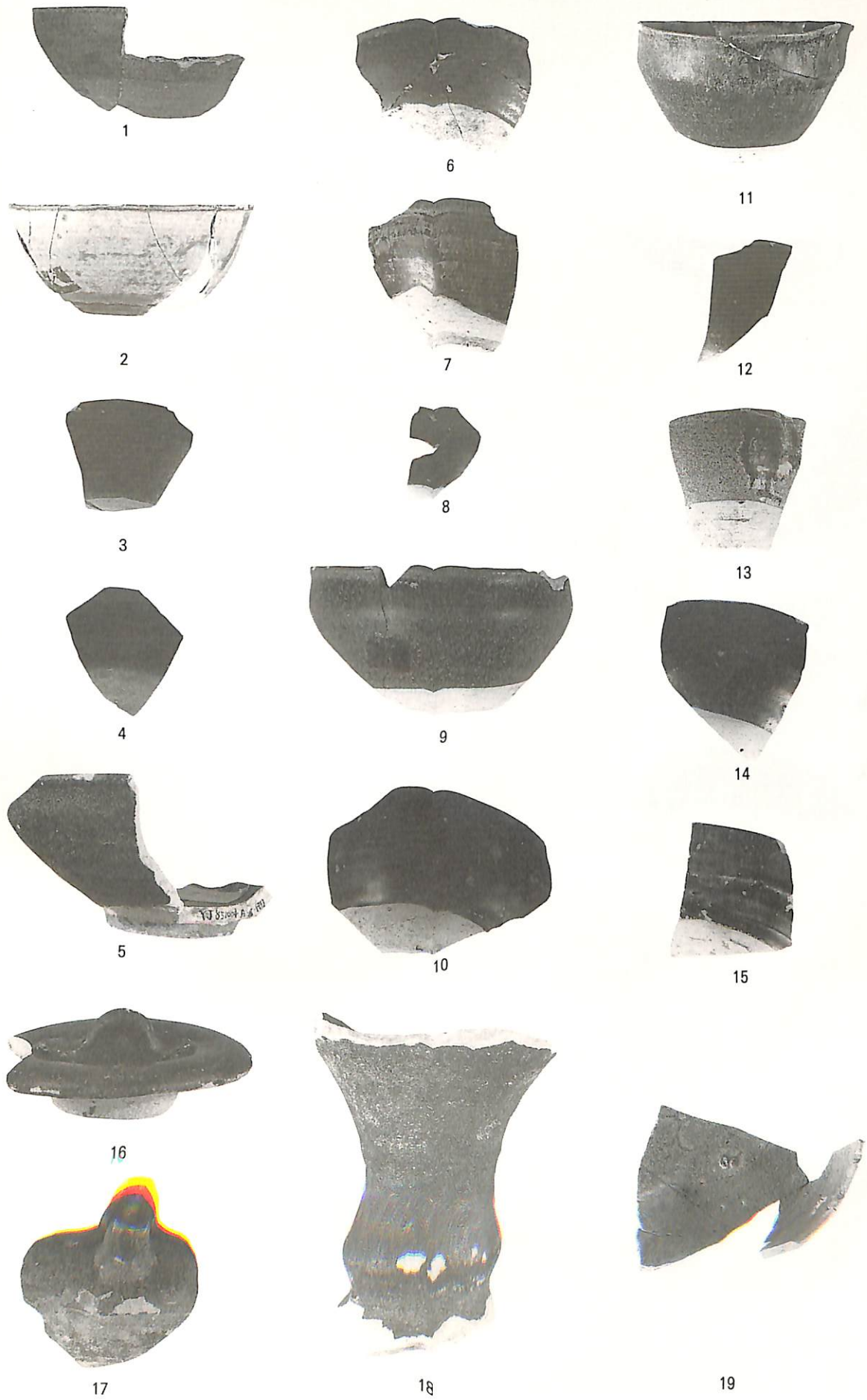


写真10：第一次調査出土遺物 (3)

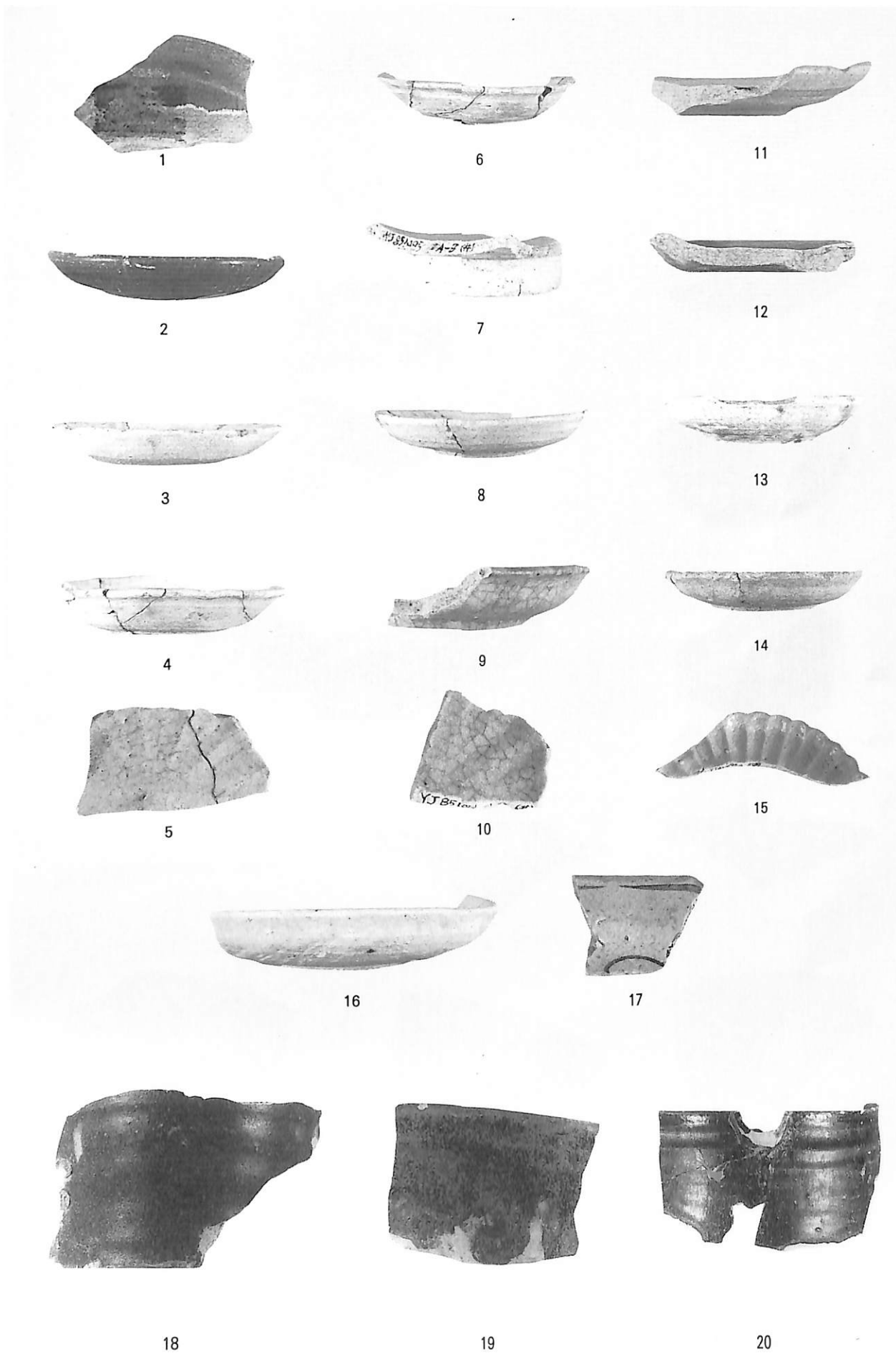
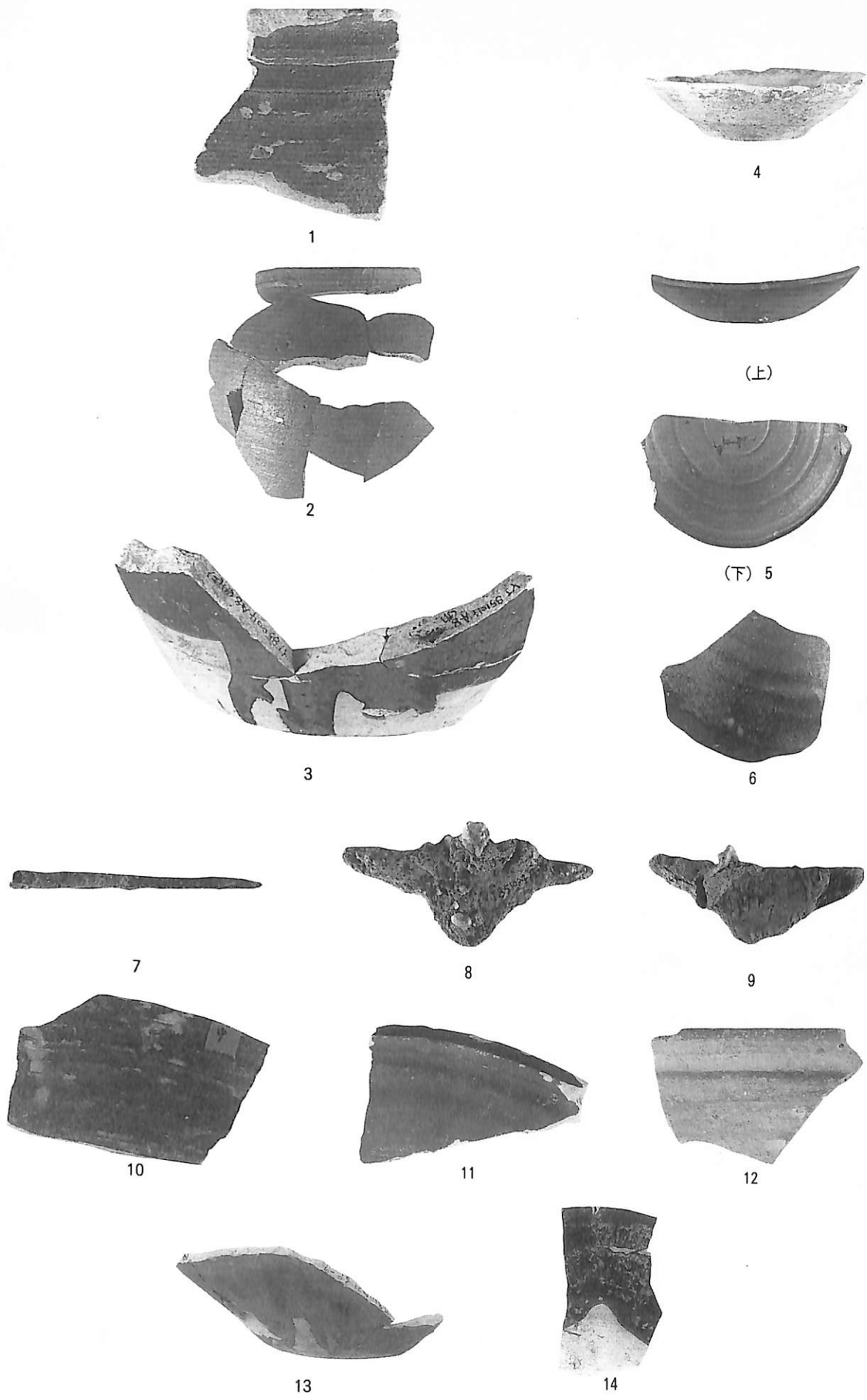


写真11：第一次調査出土遺物 (4)



愛知県長久手町 岩作城跡発掘調査概要報告書

平成 9 年 2 月 1 日

編集・発行 長久手町教育委員会

〒 480-11 愛知県愛知郡長久手町大字岩作字城の内60番地の1

☎ (0561) 63-1111

印刷 有限会社 光 版 社

長久手町中央図書館



00854582